

魔法科高校の黒トリガー使い

三日月達也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法科高校の劣等生とワールドトリガーをクロスしてみたいと思いききました。

誤字、おかしなところなどありましたらご報告ください。

◆九校戦に進む前にすべての話を修正しようと思っています。この表現や話し方がおかしいなど、思ったことがありましたら活動報告の「修正について」にコメントしてくれるとありがたいです。

このようなことになったのは最近投稿スピードに気をとられすぎて話の展開や表現が雑になってしまったからです。自分一人では気づけないところもありますのでどうかご協力よろしく願います。

また九校戦後もコメントいただけるとありがたいです。
皆様どうぞよろしく願います。

投稿について活動報告で随時報告しています。ご覧ください。

目次

プロローグ

神様転生 リメイク済み | 1

黒い悪魔 8月24日リメイク済み | 7

恋のフラグ 8月24日リメイク済み | 15

入学編

入学式 8月24日リメイク済み | 20

空閑悠一は波乱から逃げられない運命である リメイク済み

26

下校時 リメイク済み | 32

生徒会 そして…………… リメイク済み | 38

空閑悠一VS司波達也 リメイク済み | 45

昼休み リメイク済み | 55

風紀委員初仕事 リメイク済み | 61

劣等感 リメイク済み | 67

魔法科高校の美少女探偵団 リメイク済み | 70

何気にフラグを立てていくスタイル リメイク済み | 77

テロ前日 リメイク済み | 83

ブランシユ到来 リメイク済み | 88

悪魔の追い討ち リメイク済み | 97

二十八家総会議 リメイク済み | 106

司波達也と黒い悪魔 リメイク済み | 114

九校戦

試験勉強 | 123

作品のリメイクについて | 132

プロローグ 神様転生 リメイク済み

画面の向こうの皆様、どうもはじめまして。
今現在の状況を確認してみよう。

真っ白な空間にいる。

そして目の前には大人の美人な女性がいる。

以上……………

え、それだけって？

だって本当なんだよ！

俺さつきまで自分の部屋で休日のみ過ごせる昼寝をしていんたんだぞ！それが目が覚めたら真っ白な空間……………これ以外に何があるというのだ。

「えくとそろそろいいですか？」

「あ、すみません。今画面の向こうの人たちに状況を説明していたところなので」

「メタイよ！後、私神だから心読めるからさつきの説明聞いていたよ」
まじか、何となく予想はついていたがまさか神様だとは……………にしてもすげー美人さんだな。

「そんな……………美人なんて……………／／／」

心読めるのでしたね……………てか何気に美人って言っちゃったよ恥ずかしー！

「いえいえ、言われて嬉しかったのでお気になさらず」

気にします……………

「さて、本題に入ってもよろしいでしょうか」

「は、はい」

俺神様に合わないといけないことしたっけ……

すると神様が正座して地面に手を置き、頭を下げた……え？

「本当に、すみませんでした！」

……………何この状況。

目の前の美人な神様が俺に土下座をしている……………おいおいおい

！

「ちよ、何をしてるのですか!?!」

「私は、本当に取り返しのことかできないことをあなたにしてみました」

「とりあえずまず説明してください」

「はい、実は……………」

聞いた話を簡単に言うと

神様は世界におけるあらゆる魂の監視をしている

理由は世界に悪影響及ぼす魂があれば神様のところへ連れて所謂地獄で閻魔様に更生させるらしい

そして悪影響を及ぼす魂が現れたのでいつものごとく連れてきた

しかしその人が俺と同姓同名で年齢も同じ、間違えて俺を連れてきたというわけであった

もちろん本来連れてくるはずの人は連れてきたが、一度連れてきた魂は元に戻れないので実質俺は死んだというわけだ

「……………というわけです……………」

その話を聞いたとき俺は不思議と悲しくはなかった。孤児院育ちで一人暮らしの俺には帰れなくても困ることは特になかったからだ。

「それで、俺結局どうなるのですか?」

「元の世界には戻ることは出来ませんが別の世界へ行くことはできません」

ん、?それっていわゆる

「はい、異世界転生というやつです」

まじつすか。俺は転生系などの漫画や小説が好きだったので嬉しかった。

「行く世界はアニメの世界でもいいですか？」

「はい、どこでも構いません」

うーん、どうしよつかな……そうだ

「じゃあ「魔法科高校の劣等生」をお願いします」

「わかりました。それで特典などはどうしますか」

きた、転生系お決まりの特典。何個ぐらいつけられるのだろう

「何個でも構いませんよ」

そうだ心読んいたんでしたね……え、何個でも？

「はい、何個でも。元々は私の不手際でこうなりましたから」

じゃあどうしよつかな……よし

「決めました、特典は

・ワールドトリガーのレプリカ

・遊真の黒^{ブラック}トリガー

・風刃

・嘘を見抜くサイドエフェクト（オンオフ機能あり）

・北海道を覆うようなサイオン量

・強化睡眠記憶

・身体能力の成長限度なし

でお願いします」

「わかりました。容姿や名前はどうしますか？」

「えーと……容姿は遊真で髪は黒髪、身長は170cmで。後遊真の黒トリガー使ったときに白髪になるようにお願いします」

「他にはありませんか」

「特には……あ、転生するとき沖縄襲撃の時をお願いします」

「わかりました、それでは先にレプリカと会っていた方がいいでしょう」

神様はそう言うと右手を前に突きだしその先から光の粉のような物が現れた。しばらくすると黒いボディ、耳のような角が特徴的なトロン兵、レプリカが出てきた。

「始めまして、わたしの名はレプリカ」

「始めまして、俺の名は……空閑悠一だ。悠一と読んでくれ」

「わかった。よろしくユーイチ」

新しい人生ということで俺は名字を変えて新しい名前をレプリカに教えた。このとき改めて俺の二度目の人生がスタートするのだと自覚した。

「挨拶終わったところでそろそろ転生しましょうか」

「はい、あ、後1つ欲しい物があるんですけど」

「何でしょうか」

「ステルス機能付きで丈夫なパーカー付きのマントをお願いします」

これは向こうに行つたとき達也たちにまだ正体を知られたくないからである。

「わかりました。向こうについたときにお渡しします」

「色々、ありがとうございます」

「私のせいでこのようなことになりましたから、では転生します」

俺とレプリカの前に丸いゲートみたいなのが現れた。

「それでは行ってきます」

「幸運を願っています、悠一さん」

ゲートを潜ると目の前が真っ白になった。

気がつくとき「魔法科高校の劣等生 追憶編」の舞台、沖縄のある島にいた。

すでに辺りは警報が鳴り響いて遠くから銃声が聞こえる。

「レプリカ簡潔に言うぞ、今ここでは戦争が行われている。俺たちは正体を知られずに敵国を殲滅するぞ」

すると目の前に黒いパーカー付きのマントが落ちてきた。神様に頼んだやつだろう。

「レプリカこのマントのステルス機能をコピー出来るか？」

ワールドトリガーではレプリカは相手の攻撃を解析して印にしていた。

「……………すまないがこの機能を完全にコピーするには少し時間がいる」

「どれくらい？」

「最低でも1時間は必要だ」

まじか、じゃあ

「とりあえずそれを元に光学迷彩とか出来る？」

「可能だ」

「頼む」

「心得た。……………解析完了、印は【ステルス隠】にした」

「効果は？」

「原作のカメレオンと同じだ」

レプリカ原作の知識あるのかよ……………

「わかった、とりあえず敵を倒すぞ」

「了解した。作戦は？」

「とりあえず出会った敵を倒していく。レプリカは子機を作り出して何かあったら知らせてくれ、後ラービットは何体作れる？」

「今私自身のトリオンとなると5体が限界だ」

「十分。ラービットは出来るだけ達也から遠ざけてくれ、達也の「分解」で消されるからな」

こう思うと達也ってまじチート。俺も人のこと言えないが

……………

「そんじゃあ行こうか」

左手の人差し指にはめてある黒い指輪がキラリと輝く。

「トリガー オンー」

掛け声と共に俺の体は全身黒いトリオン体になった。レプリカは左腕と一緒になっていて特徴的な角が出ている。

そして神様からもらったマントを着た。
「それじゃあ……………」

「行こうか」

黒い悪魔 8月24日リメイク済み

今沖縄を襲撃しているのは大亜連合だ。一般市民とか関係なく殺している。この時点で俺たちの敵、それだけわかっていれば十分。別の世界とはいえ俺としては日本は好きだし修学旅行で一度だけ来た沖縄は気に入っていたからだ。

それをなんもためわらず破壊していくのは許せない。まあ、自分もその戦闘に参加しているからこの島を汚してしまふ。終わったら復興作業とかを手伝おう。建物は直しても自然は中々戻らないから時々ここにきて海のごみ拾いでもしようかな。

そんなことを思いながら俺は出会った敵を印を使わず素手で倒していく。

驚くべきことにトリオン体では実弾は効かない。対魔法師専用のパワーライフルでも効果はなかった。そして思う……………これの世界魔法以外だとチートじゃね?…………あ、元からチート機能満載でした。

「レプリカ、現在の状況はどうなっている」

肩から細い棒みたいなのが出てきてその先が口のような形をした。

「今のところ日本軍が優勢だ。ラービットも倒されることなく活動している」

「でしようね、A級でも手こずるラービットをそうそう倒されてたまるか。」

「子機から連絡が来た。司波達也が行動を開始した」

「もうか、なんか早いような気がするが…………」

「子機を出来るだけ達也から遠ざけろ、エレメンタル・サイト精霊の眼で発見されると厄介だ」

「了解した」

「さて、もう少し暴れますか…………」

「こんなもんかな」

あれから1時間たった。今この場にいるのは俺とレプリカと2体のラービット。ちなみに全員無傷だ。

「侵攻軍は陸上から撤退した。わずかな兵士がいるが白旗を上げて降伏したようだ」

「ならこれで終わり……………」

なんか忘れていている気がする……………何だっけ……………

「…！ユイチ、さらに増援だ！軍艦が合計で20隻もいるぞ」

そうでした！達也が「マテリアル・バースト」を敵艦に向けて撃とうとして、そこに爆弾が来るけど桜井穂波さんが達也を守って死んでしまったという話だったんだ！

てか軍艦多くないか!?原作だと6隻ぐらいのはず……………俺が暴れたからさらに増えた?なんてこつたい!

「レプリカ!ここから達也のどこまで距離はどれくらいある?」

「ここからだと20kmはある、走ったところで間に合わないぞ!」

く、だったら……………」

^{バウンド}「弾で行く、方向と角度を計算してくれ!」

「心得た……………計算完了、データを送る」

頭の中に方向とどの角度に印を設置するデータが送られてきた。サンキューな!

^{バウンド}俺は海の方向を向いて

「^{クインティ}弾」印 五重!!」

目の前には印が出てくる。それを助走を思いきりつけて……………」

飛ぶ!

「よし……………つて、早〜……………」

予想以上に早い、まじで顔がすごいことになってる。

「っ!見えた!」

しばらくすると達也がライフルみたいなCADを海に向けていた。恐らくもうすぐに発動出きるだろう。しかしそれを拒むように爆弾

が達也に向かっていった。そして離れた場所で穂波さんがバイクでこつちに達也の方に向かっていて。

「まずい、このままじゃ間に合わない！そうだ【射】^{ボルト}で破壊すれば……」
「だめだ、遠すぎる」

「くそ、どうしたら……」

「ユーイチ、もう一回【弾】^{バウンド}で加速しろ」

「でもそれだったら達也のところに激突する！発動を妨害してしまうぞー！」

「大丈夫だ、わたしが減速の魔法を着地直前にかける、それなら問題ないだろう」

「確かに……って、お前魔法使えたっけ？」

「データの中に全ての起動式が入っていた。恐らく神様の計らいだろうな」

「………ありがとう神様。」

「わかった、頼んだぞ相棒！」

「心得た」

レプリカの声が嬉しそうに聞こえたのは気のせいだろうか
………機械の声みたいだからあんまりわからない。

【弾】^{バウンド}印！

加速するとあつという間に目の前に達也とバイクに乗っている穂波さんがいた。

着地直前にレプリカが減速魔法をかけてくれたおかげで激突することなく着いた。

「貴様何者だ！」

達也の後ろにいた確か……そうだ真田さんだったけ、CAD関連の高度な技術を持っている人だ。

その真田さんが俺に銃を向けている。

「それは後だ、俺はあの爆弾を止める！穂波さんは手を出さないでくれ！」

穂波さんは自分を知っていることに驚いている。ごめんなさいね名前で呼んで。

「達也、あれは俺が止めるからお前はしっかり敵を狙ってろ」

達也は無表情だがその眼は驚きに満ちている。

そして目の前には爆弾が近づいている。

「(出し惜しみせず全力で防ぐ!)」

ブレスト シールド セブタ
「強」印 + 「盾」印 七重!!!」

俺たちを覆うようにシールドが現れ、爆弾を全て防ぐ。

そして達也の「マテリアル・バースト」が発動し、敵艦全てを殲滅した。

ふうう、これで一件落着……

「お前は誰だ、なぜ俺や穂波さんを知っている」

達也は右手を俺に向け手を突きだしている……てやべええ! どうしよう、逃げようとしたら俺消されるじゃん!

穂波さんもCADをいつでも発動出きるように準備している……これ絶対絶命?

『(ユーイチ)』

レプリカが内部通信で俺に話しかけてきた。

『(しばらく時間をかせいでくれ、なんとかする)』

『(わかった、頼んだぞ)』

「おい、聞いているのか」

達也がピリピリしている。

「わかったわかった。話すからその手を下げてくださいか」

「お前の話の内容しだいでおろす」

「わかったよ、何が聞きたい?」

「さっき言った通りお前は誰だ、そしてなぜ俺や穂波さんを知っている」

「うくんそうだな……俺はお前らの敵じゃない、少なくとも今回は日本軍の味方だよ」

「…………お前は軍の人間か?」

「違うよ」

悠一は即答した。

「即答か……」

「だって軍みたいな規律とか俺嫌いだからね、俺は自由に行動してるだけだ」

「では、顔を見せろ」

悠一はパーカーで顔を隠しているため他の人には口と髪の一部しか見えていない。

「それは出来ない、見せたくないからね。たけどお前たちを知っている理由なら教えられるよ」

達也は顔を見せないことに怪しさを感じながら得られる情報から得ようと思った。

「それでは何故俺たちを知っている」

「それは俺の独自の情報網というやつだ、お前の妹や親の名前も知ってるぜ」

悠一がそう言うと言達也はますます警戒心を高めた。この時点で悠一を消してもいいと思つたがもう少し聞き出すことにする。

「なぜ俺を助けた」

「あのままだったら軍艦が来てさらに戦況が悪化、またはこっちの負けになると判断したからだ」

「では……」

「特尉」

風間が間にはいった。

「尋問なら後にしよう、君も穂波さんもご家族が待っているだろう。君は私たちと一緒に来てもらう、抵抗はしない方がいい」

完全に囲まれているなかで悠一は笑顔を浮かべた。

「何を笑っている」

達也が魔法を発動しようとするが

「いやね、確かにこの状況では俺に逃げ場はないね。でも、俺がこの話している間なにもしてないと思つたか？」

『【鉛】印 + 【射】印 二重』

達也たちそれぞれの背後から子機のレプリカが鉛弾を放った。

悠一とレプリカが使う鉛レッドバレット弾はトリオン体じゃなくても使用可能で痛みは与えないが当たった箇所に決めた重さの重りをつける。今のは約50kgぐらいだ。なお時間制限があり、消費するトリオンは重さ、時間によって決まる。

達也たちは身体中に重りをつけられてたまらず倒れる。

「悪いね、まだ正体を知られたくないんで。達也、またいつか会うからその時まで待ってろよ」

悠一は海に飛び込み【ステルス隠】を発動してそのまま遠いビーチまで泳いだ。

達也は自分の身に起こったことを理解できず、呆然としていた。

「(あいつは一体何者だ……)」

その後10分ぐらいしたら重しは消えた。

<悠一視点>

「あー疲れた」

海から上がった後、近くにあった家の中で休んだ。中は窓ガラスが割れただけで休むには十分な場所だった。

「レプリカ、子機とラービット全部回収した？」

「問題ない、全て回収済みだ」

「そっか……これからどうしようっか」

「いつまでもここにいるわけにはいかないだろう、恐らく四葉家の者が追ってくるはずだ」

「ですよね……はあ」

ため息をつくとき、テーブルに通帳と手紙が落ちてきた。

「なんだこれ」

手紙の方を先に読んでみると

拜啓 悠一さんへ

お疲れ様でした悠一さん。あなたの活躍はこちらから拝見しましたよ。あなたにお伝え忘れていたことがあります。それは住む家です。あなたはおそらく第一高に進学すると思つて東京に家を建てたのでどうぞお使いください。一緒にある通帳はこれからの生活に役立ててください、ちなみに毎月一定金額振り込むので節約しなくても大丈夫ですよ。他に聞きたいことがありましたら手紙に書いてある番号で連絡してください。

あなたのことを遠くから見守っています。

神様より

「(ありがとう、神様)」

通帳を見ると1が1つ0が11個あつた………つてええええ！

神様ありがたいけど最初からこの金額はちよつと、しかも毎月増えてくる……罰あたりそうだけど、まあいっか。

「よし、レプリカ空港の状況を見といてくれ。できる限り早く東京に行くぞ」

「了解した」

あれから数日がたつて空港が使えるようになり、飛行機に乗つて東京に移動した。一応使つた家には使わせてもらつたお礼として金庫に10万置いといた。え、どうやって開けたかつて？そんなものレプリカの力で開けてもらいました。レプリカすげえー

特に四葉の追手はなかつた。それはそれでよかつたけど東京に着いてからが心配だ。十師族に俺のことが知られ、俺を手に入れるため血眼になって探していることをレプリカから聞いた。常に【ステルス隠】発動しところかな………ちなみに俺のことを「黒い悪魔」と呼んでいるらしい。見た目だけかよ。ネーミングセンスないな。

そんなこんなで一応無事家に到着。

まず一言……でかい。普通の二階建ての一軒家を想像してほしい、その倍だ。一人で住むにはでか過ぎると思うがせっかく用意してくれたんだ、ありがたく使わせてもらおう。

中は必要最低限の家具しかなかった。まあ他に何か要るものあれば買うから問題ない。以外と部屋が少ないと思ったが奥にでかい部屋があった。が、もはや部屋と呼んでいいのかわからない。広さが教室の2個分ぐらいの大きさ、これもベットやテレビなどにでもありそうな家具しか置いてなかった……と思ったが、何故か地下に続く階段があり、降りてみるとトレーニングルームがあった。プール、トレーニング機器などまるでジムだ。たぶん「身体能力の成長限度なし」の特典を最大限生かす為に造ったんだろう。なにからなにまでありがとうございます神様。

一通り見て、眠くなってきたので風呂入って寝ることにした。

さてここまでの流れで察しがついたかもしれない、そう風呂もでかい。ちよつとした大浴場だぞこれ。

ちなみに二階は機材などが大量にあった。なんの機械かはまた後日神様に聞くとしよう。

俺はゆっくり風呂に使った後、キングサイズのベットに飛び込み、すぐに睡眠がきた。

これからのことについてさっきまで色々考えていたが明日にしようと思ひ眠りについた。

こうして、後に世界に恐れられる魔法師、「黒い悪魔」の異世界転生最初の1日が終わった。

恋のフラグ 8月24日リメイク済み

「…97…98…99…100つと」

俺は背筋を終えると寝転がった。

「ふう、さすがに100回はきついな……」

あれから3ヶ月、特になんもなく平穩に過ごしている。

今はトレーニングルームで腕立て、腹筋、背筋の定番の3つを100回3セット終わったところだ。

「えくと、今日はレモンにしよう」

このトレーニングルームには何種類ものスポーツドリンクが自動で出る自販機みたいなのが置かれていた。もちろんタダである。

「〜、酸っぱい！けど運動した後はこれがいいんだよな」

毎日トレーニングと魔法の勉強をすることが俺の日課になっている。後このルームにはトリオンで作られた訓練室があることに気づき、最近ではラビットと印なしで戦っている。今のところ戦績は五分五分だ。

二階にあった機械はCAD関連と魔法の処理速度を計測するものだった。魔法の処理速度は魔法力の一部で現代魔法師にとっては重要な項目である。

魔法力とは

- ・サイオン情報体を構築する速度が魔法の処理能力
- ・構築できる情報体の規模が魔法のキャパシティ
- ・魔法式がエイドスを書き換える強さが干渉力

の三つを総合して魔法力と呼ばれる。

これらの機械のお陰で200msぐらいになった。確か深雪で235msだったはず、この時点で俺深雪に勝っちゃったよ………

今は11月、試験の3月まで家庭教師ことレプリカと一緒に二度目の受験勉強を取り組んでいった。

試験当日

『試験終了』

筆記テスト終了のアナウンスが流れると共に鉛筆を置く音が一斉に鳴った。テストならではの音である。

え、試験まで早くないかって？気にするな！

自分としては実技も筆記も上手くいけた自信があるので大丈夫だろう。なんか実技の時やたらと注目されていた気がするが気のせいだろう。

俺はケーキを買って帰り、レプリカとテレビゲームや将棋などをした。もちろん全敗、レプリカに勝てる気が一向にしなかった……………

合格発表

第一高校の合格発表は掲示版に番号が書いてあるのが貼り出されるという昔ながらの方法だった。これはこれで一種の春の風物詩みたいな物なので個人的にはいいと思った。

結果は一科で合格。

資料を受け取り、そのまま帰ろうとすると

「ちよつと待つてください」

振り向くとそこには第一高校生徒会長、七草真由美さんがいた……………つて原作キャラきたああ!!達也の時は感激してる場合じゃなかったからなあ……………やばい、めっちゃテンション上がってきた。

「あの〜」

「あ、すみません。何でしょうか」

「空閑悠一君…ですよね？」

「はい、そうです」

「良かった、間違っなくて。私はここの生徒会長を務めている七草

真由美です。漢字の7とくさと書いて七草と書きます」

はい知ってます、とはさすがに言えない。なので

「やっぱり七草さんでしたか」

「私のこと知ってるの?」

「はい、九校戦見に行った時によく印象に残っていましたから」

嘘ではない、俺は去年と一昨年の九校戦を実際に見に行っている。とても白熱した試合で見てたえがあった。

「そう、なんだか照れるわね」

「エルフィンスナイパーと呼ばれることはあると思いましたよ」

「出来ればその名前を言うのはやめてほしいんだけどね」

「そうなんですか、可愛い七草さんにはびったりだと思いますけど」

「ちよ、可愛いって…」

「?、どうしました?」

「ううん、何でもないよ（まさか無意識に言ったの?）」

「ところで七草さんは何の用で俺に」

「つとそうだった、すっかり忘れてたわ。後私のことは真由美と呼んでちょうだい」

「いや、それはさすがに……」

「真 由 美!」

「……はい、真由美さん」

多分達也もこのノリに負けたんだろうなあ。

「ふふ、それでよし!で、用件だけどあなたには新入生総代をやってもらいたいの」

「………へ?」

「要するに入学式で答辞をやってもらいたいの」

「いやいや、俺が答辞!?そういうのは入試トップの人がやるものですよ!」

「だからあなたがトップなのよ、入試の」

「………俺が、ですか?」

「そう、筆記はほぼ満点、実技に至っては過去最速記録よ、これで入試1位じゃなかったらおかしいでしょう」

まじか……………いやまあ11月の時点で実技深雪に勝ってたらこうなることは大体予想つくだろうけど、前世で1位という文字からかけ離れていた俺にとっては信じられなかった。人が多くいるなかで話すとか無理！だから

「すみません、俺そういうスピーチみたいなの苦手なのでお断りさせてもらいます」

「え、ちよつと待って悠一君、新入生総代だよ、降りるってことは新入生総代じゃなくなるんだよ？」

さりげなく名前と呼ばれてる。なんか嬉しい。

「それでいいですよ、総代なんて興味ないですし」

「……………まあ嫌なら仕方ないか、じゃあ次席の人にやってもらうことにするしましょう」

「すみません、ありがとうございます」

「大丈夫よ、後

真由美さんは俺の耳に口を近づけ

「可愛いって言ってくれありがとう、嬉しかったよ」と囁いた。

「え、ちよつと、真由美さん!？」

「ふふ、じゃあね悠一君！また会いましょう」

真由美さんは走って校舎に戻っていった。

「……………まったく、本当に小悪魔みたいな人だな」

「(ユーイチは天然タラシの素質があるな)」

<真由美 side>

私は今スキップしながら生徒会室に向かっている。

「空閑悠一君かあ、あの子も結構可愛いところあったわね」

さっきの慌てぶりようを見てクスッと笑う。

「可愛い、か……………あんなに直球で言われたの初めてかも」

そしていつもの生徒会室にたどり着く。中には摩利、はんぞー君、リンちゃん、あーちゃんが入学式に向けて準備していた。

「皆お疲れ様」

「おー真由美、どうだった入試1位は」

「それが断られちゃった」

「、はい？」

「なんか人の前に立って話すのが苦手みたい、別に自分が総代じゃなくたっていいって言うていたから次席の深雪にお願いすることにしたわ」
「なんか変なやつだな」

「でも可愛いところもあったわよ」

真由美は思いだしてもう一度クスッと笑う。

「……お前何かあったのか？」

「え、何が？」

「お前顔赤いぞ」

「え、え、!？」

「ははーん、さてはお前、もしかしてそいつに惚れたか？」

「!!?!」

服部と市原、中条が驚きの顔で真由美を見る。特に服部は青ざめた顔をしている。

「違うって摩利！別に私は悠一君に惚れてなんか……」

「その割りには名前で呼んでいるじゃないか」

「あ、いや、その」

「良かった、お前にもちゃんと自分の意思で好きになる人ができてあたしは嬉しいぞ」

「だから違うってばー!!」

真由美の声が校舎中に響いた。

入学編

入学式 8月24日リメイク済み

国立魔法大学付属第一高校

この学校は国立魔法大学へ最も多くの卒業生を送り込んでいる高校として知られている。

この高校で求められるのは魔法師としての才能。故に徹底した才能主義であり、残酷なまでの実力主義。

それが魔法の世界。

この学校に入学した時点でエリートと認められる。

しかしこの学校には優等生である一科フルームと劣等生の二科ウイードの二種類に入学した時点で分かれている。

今までは一科フルームが二科ウイードより優秀なのは当たり前、その逆はありえない、という常識が定着していた。

しかしこの第一高校に優等生の妹と劣等生の兄が入学することでその常識が崩れ始めた。

そして、

後に世界最強の魔法師とまで言われる少年も第一高校の中庭の木の上で

……静かに寝ていた。

「おい、ユーイチ起きろ。入学式十分前だ」

レプリカは口から計測器を出し、それを悠一の頭にペシペシと叩いた。

「痛い、痛い、起きてるからレプリカ」

悠一はふあくー、と大きなあくびをした。

「十分前になっても起きなかつたら叩いても起こせと言ったのはユーイチだが」

「いや言ったけどお前のそれ地味に固いから結構痛いんだよ」

悠一は木から飛び降りると講堂に向かって歩き始めた。

「うわ、結構いるな」

悠一が着いたときには五分前だったので席は殆ど埋まっていた。

だが、前の方を見ると1つ空いているところがあった。

「あそこに座らしてもらおう」

ちなみに悠一は一科なので前に座っても問題ない。たぶん二科でも座っていたかもしれないが。

空いている席の隣には二人の女子が仲良く話していた。だが悠一は見てすぐに気づいた。

「まさかのほのかと雫!? どうしよ、またまた原作キャラ会ってテンション上がってきたあ!! でもいきなりテンション上がっている状態で話しても気持ち悪いって思われても嫌だからここは冷静に………」

二回深呼吸をして悠一は二人に話しかけた。

「あゝ」

「は、はい！」

ほのかさん、そんなに怖がらなくても………

「席空いてないからここに座っていいかな？」

「ど、どうぞ」

「どうぞ」

雫さんは相変わらず。

「あ、俺は空閑悠一だ。これからよろしくな」

「わたしは光井ほのかと言います。よろしくお願いします」

「私は北山雫、よろしく」

とりあえず自己紹介できて安堵した悠一。

「あの、もしかして悠一さんってA会場にいました？」

第一高校は倍率が例年高いので、AからEまでの会場に別れて受験する。悠一はA会場だった。

「そうだけど、何か？」

「あなたの実技雫と一緒に見てたんです、すごいですよ170msって大人のA級魔法師でもいませんよ！」

「うん、すごかった」

「(あくー、だから周り騒がしかったんだ………なんか恥ずかしい)」

「全力でやった結果だ、自分としてはあそこまでいくとは思っててもみなかったけどな」

実は悠一、自己最高記録は98msである。だが、入試当日は調子が悪かったので本人的にはあまり喜べなかった。

「空閑さんは……」

「悠一でいいよ」

「でしたらわたしもほのかと呼んでください」

「私も雫でいいよ」

「それじゃあお言葉に甘えて。で、ほのかは何かな」

「悠一さんは新入生総代じゃないんですね、あれだけの記録を出したから総代だと思ってたので」

「(実はスピーチとか苦手だから断りました、なんて言えるはずがねえ！) 多分筆記の方がだめだったと思う。自信なかったし」

「でも魔法を使う上では知識も必要」

雫の的確なツツコミに、冷や汗がダラダラと出る悠一。
ちやうどその時に入学式を始めるアナウンスが流れた。

「と、とりあえずもうそろそろ始まるから、この話はここまでで」
そうですねとほのかが答えるが、雫はジーンと悠一のことを見ていた。

「(雫、こっちは見ないでくれえ……………)」

これといったこともなく入学式が終わった。今はIDカードをもらうためにほのかと雫と一緒に歩いていた。

「新入生総代の深雪さんとっても綺麗でしたね」

「そうだな、俺が総代よりあのの方が適役だな」

「別に悠一さんでも大丈夫だよ」

「(雫さん、あざーっす!)」

「(ユーイチ大丈夫か?)」

原作キャラに出会ってキャラ崩壊気味な悠一である。

「ふー、やつともらえた」

思ってたより人が多く、混んでいたので貰えるのに10分ぐらいかかった。

「ほのかと雫は何組?」

「わたしはA組です」

「私も」

「俺もA組だ、二人ともよろしくな(よっしやあ!しかも深雪もA組、俺運ほとんど使いきったんじゃないやねえかな……………)」

「悠一さんはこれからどうするの」

雫が問いかける、そこで悠一が空想状態から戻ってきた。

「とりあえず家に帰ろうかな。やりたいこともあるし」

「わかった」

「悠一さんまた明日教室で」

「おう、また明日」

廊下で二人と別れると悠一はそのまま家に帰った。

翌日、今度は余裕をもって15分前登校した悠一はまっすぐに教室に向かっていた。

そして教室に入ると

「悠一さんおはようございます」

「悠一さんおはよう」

ほのかと雫が悠一に気づいて挨拶した。

「二人ともおはよう」

悠一は自分の席を見つめる、そこは雫の前だった。

「お、雫の後ろか」

「そうだね」

おそらく席の順番は名字のあいうえお順だろう。

「なんかわたしだけ仲間はずれ……………」

「まあそこはしょうがないって」

そんな他愛のない話をしていると教室のドア付近がざわつきだす。

何かな、と三人が見てみると。

そこには昨日答辞をした司波深雪が近づいてくる人たちに対して軽く挨拶をしていた。

「さすがに人気だな」

「答辞の時は遠くからしか見えませんでしたけどやっぱりすごく綺麗な人ですね」

「ほのか、深雪さんに挨拶しなくていいの?」

「え、挨拶したいけど…あの状態じゃ……………」

「ほのか、こういうのは早めの方がいいぞ」

「そうそう」

「わ、わかりました、行ってきますー……………やっぱり雫もついてきて…」

「はいはい、わかったよ」

「頑張れよ、ほのか」

二人は深雪のところに行く。

だが途中でほのかが転ぶ。

けどそれがいい機会となったのか手をさしのべた深雪と挨拶することができた。雫は普通に挨拶した。

深雪が二人に何か聞いている、聞き終わると悠一の方にまっすぐ向かっていった。

「(?なんでこつちに来るんだ)」

深雪は悠一の前に立つと

「始めまして、空閑悠一さん。司波深雪と申します」

丁寧にお辞儀をする。

「知ってるよ、昨日の答辞すごかったからね」

……………なんか怒ってないか？

「ですが本来であれば入試1位のあなたが答辞をするはずでしたのに、なぜ断ったのですか？」

「……………え？(なんでそれ知ってるの!?)」

深雪の言葉にクラス中がざわつく。ほのかは驚いて、雫はやっぱりと皆反応はそれぞれだった。

空閑悠一の波乱の学生生活はここから始まった。

空閑悠一は波乱から逃げられない運命である　リメ
イク済み

現在A組の悠一と深雪以外の生徒は全員二人を見ている。特に男子は深雪と話している悠一に嫉妬と怨念を込めた眼差しを送っているが、本人はそれどころではないため気づいていなかった。

「えーと司波さん、どこでそれを聞いたの?」

「私のことは深雪と呼んでください。教えてくださったのは七草会長です」

「(ちよつと真由美さん!?何言っちゃってんの!)」

「それで、何故断ったのですか?」

深雪からの威圧に悠一は少々顔をひきつっていた。

「(ここで嘘言ったところですぐにバレる、まあ本当のこと言っても信じてもらえるかどうか……………)」

「俺は答辞とかそういう人の前に立つてすることが苦手だから真由……………七草会長に無理言っただよ」

「……………本当にそれだけですか」

深雪が顔を近づけて言う。二人の距離は鼻があたりそうなくらい近かった。この場に達也がいたら間違シズコンいなく兄の鉄槌シズコンが下るであろう。A組の男子の嫉妬は高まり、ほのかは「はわわわ」と赤面し、雫は「深雪って以外と大胆」と無表情で呟いた。

「本当だ……………後顔近い……………」

「あ、すいません」

気づいた深雪は少し顔を赤めてすぐに離れた。

「嘘ではないようですね。ごめんなさい、疑ってしまいました」

「気にしないから大丈夫(とりあえず真由美さんには何か仕返しをしておこう……………)」

「くしゅん！ うゝ、誰か私の噂でもしてるのかしら」
三年の教室に可愛らしいくしゅみやみが響いた。

A組に予鈴がなり皆席につく。しかし前の席にいる雫は悠一を
ジーっと見つめながら「嘘ついてたんだ」と言った。

「すまん、あまり目立ちたくなかったから」

「試験の時に既に目立っていたから意味ないと思うけど」

「……………返す言葉もないな」

「まあ、悠一さんなら納得したし、いいけど」

「ありがとな」

「その代わり私とほのかに放課後何か奢って」

「……………わかった」

悠一は普段からクレジットカードを持ち歩いているため金銭的に
は問題どころか使い道があまりないため高校生の買い食いレベルで
は懐を痛めることはない。

担当の先生が教室に入ってきたのでそこで会話は終わった。

その後も普通に授業を終え、昼休みは達也たちとの衝突を避けるた
め一人屋上で持ってきておいた弁当を食べていた。ちなみに悠一は
自炊、家事もなんなくこなす。

そしてあつという間に放課後、ほのかと雫と一緒に帰ろうとした
が、忘れていたため、お馴染みの達也たちとの衝突現場に居合わせて
しまった。

A組の森崎とE組の美月が言い争っていた。

悠一はそれをほのかの隣で見ている。

「（止めたほうがいいんだけど、タイミングがない…………）」

美月は森崎たちの理不尽な行動に堪忍袋の尾が切れたようで

「いい加減諦めたらどうなんですか？深雪さんは達也さんと一緒に帰るといつているんです。あなたたちが口をはさむことじゃないでしょう」

「（いや、美月さん？正論だけど言い過ぎじゃ……………）」

「いったい何の権利があつて深雪さんと達也さんの仲引き裂こうとするんですか」

「（その言い方だと二人が兄妹ではない別の関係に聞こえるんだけどね。深雪も顔赤らめてるし）」

悠一は声に出さず美月にツッコむ。

「僕たちは司波さんに用があるんだ！」

A組のモブ男言う。名前？知らん。

「そうよ！司波さんには悪いけど、ちよつと時間を貸してもらうだけなんだから！」

A組のモブ女が（以下省略）

その後も言い争いがどんどんヒートアップして、美月がブルームが一体どれだけ優れているのだと言ってしまう。

「（知ってはいたけど美月さん、こいつらにそれは禁句）」

「だったら教えてやる！」

森崎が銃のような特化型CADを美月たちに向けようとするが

「ストップだ、森崎」

大声ではないが威圧を込めた悠一の声で森崎が止まる。

「さすがにそれ以上はやりすぎだ」

「黙っている空閑！こいつらに俺たちが優れていることを教えて：

「法律破ろうとしているやつが何を言ってるんだ」

悠一が呆れるように言う。レプリカは内部通信で「ユーイチのその言い方もあまり良くないが」というが悠一は「わかってるが、少し黙っていてくれ」と返した。ちなみに悠一の今の状態は生身だが、レプリカと内部通信は出来る。

「森崎、お前のように自分が一科だと誇りに思うのは別にいい。プライドもある程度は必要だ。だが俺たちが一科と呼ばれているのは魔

法力だけだ」

「魔法力が優れているということとは俺たちの方が強いということだろうが！」

「けどお前さつきそのまま発動しようとしていたら、そのCADその警棒持っている人に弾き飛ばされるどころだったぞ」

その言葉にエリカが驚いた。確かにエリカは警棒で森崎のCADを弾くつもりだったがまだ警棒を取り出そうとしていたところであり、自分の実力による結果を悠一に言われると思わなかったからである。

「俺たちは魔法力はこいつらより上だが、実際の戦闘になるとこいつらの方が動けるぞ」

「……だが！」

「だがもくそもねえ、俺たち魔方師に一番必要とされているのは魔法力じゃない、いついかなる時でも自分の力を十分に発揮し己の役割を果たす意思だ」

誰も悠一の言葉に反論の意見を述べる者はいなかった。

「まあ、俺もそんなに人に言えた立場じゃないが、こういうことはもうすんなよ」

「さつきからそちらの二人の会長さんが厳しい目でこつちを見てるからな」

少し離れたところに風紀委員長の前田摩利と生徒会長の七草真由美が悠一たちを見ていた。

「……ここで言い争いが起きてると連絡があつて来たんだかな」

悠一が二人の近くに行き。

「このようなことはもうしませんのでどうかここは見逃してもらえませんか」

悠一は頭を下げて言う。

摩利はしばし悩むが

「見たところ魔法も発動してないようだし今回は不問にしましよ、摩利」

以外にも真由美の援護。これには悠一も驚く。

「……しかしだな」

すると達也と深雪も近づき

「今後このようなことにならないようにしますので、お願いします」

「私からもお願いします」

二人も頭を下げると後ろにいた全員も頭を下げ始めた。

「わかった、ただし同じようなことがあれば今度こそ説教喰らってもらうぞ」

「ありがとうございます」

悠一は再度頭を下げる。

渡辺と真由美が戻ろうとするが、渡辺が悠一と達也を見て

「悠一君には明日昼休み生徒会に来てもらいたい、後そこの……」司波達也です」達也君も深雪さんと一緒に来てもらいのだが」

ここで断るのも悪いと思った三人は了承した。

後で気づくがさりげなく名前で呼ばれている三人である。

「あ、悠一君ちよつと来て」

真由美がチヨイチヨイと手招きする。

そして背伸びして悠一の耳元で

「一つ、借し作ったからね」

と囁いた。

「え、ちよー！」

「ふふ、また赤くなってる。もしかして耳が弱点だったりして。それじゃあまた明日」

真由美が離れていくと悠一はその背中を見つめながら思った。

「小悪魔みたいじゃなくて本当に小悪魔だよ、あの人は」

「なあ、真由美」

「なに？」

「絶対惚れてるだろ、悠一君に」

「な、ななな、そんなわけないわよ！」

「落ち着け、日本語がおかしくなってるぞ」

「それに、摩利だって名前で呼んでいたじゃない！」

「別にいいだろうそれくらい」

「摩利こそ惚れたんじゃないの？」

「何を言っているんだ！私にはシユウがいる！」

……こうして風紀委員長と生徒会長の言い争いは生徒会室に着くまで続いた。

下校時 リメイク済み

<悠一視点>

あの後森崎たちは達也たちを少し睨んで帰っていった。さすがに入学早々説教を喰らったなんて周りに知られたら魔法師としての未来が危うくなる。今回は未遂なためそのようなことはないだろう。

そして俺はほのかと雫と一緒に達也たちの前に立っている。

「すまなかつたな」

「いや、こちらのせいでもある。お前が止めてくれなかったら入学早々問題児になるところだった。ありがとう」

俺が止めなくてもお前がなんとかするけどな、と悠一は心の中で思った。

「改めて、司波達也だ。よろしく」

「空閑悠一だ、こちらこそよろしく。俺のことは悠一と呼んでくれ」

「わかった悠一。じゃあ俺のことも達也と呼んでくれ」

「わかったぜ達也」

「あゝ」

美月がタイミングを見計らって話しかけてきた。

「さつきはごめんなさい、おかげで助かりました。私は柴田美月と言います」

「いいよ、さつき達也にも言ったようにこっちにも否があるから」

「ありがとうございます。ほら、エリカちゃんにレオくん、二人も言うことあるでしょ」

「ごもっともと言いたげな顔したエリカとレオ。」

「さつきはすまねえな、ついカツとなったわ。ありがとな。俺、西城レオンハルトだ。レオって呼んでくれ」

「わかったレオ。今度から気を付けろよ」

「ありがとね空閑くん。あたしは千葉エリカ。エリカって呼んで」

「わかったよエリカ」

俺は雫達の方に向いて

「お前達も自己紹介したほうがいいぞ」

そうだね、と雫が相槌をうち、

「私は北山雫。よろしくね」

「わ、わたしは光井ほのかです！よろしくお願いします」

ほのか緊張しすぎ

「それにしても空閑くん、よくあたしがCADを叩き落そうとしたのわかったね」

「こう見えても観察能力には自信があつてな、体の重心とか足の位置とか見てかなりの手練れだと思つたんだ」

ほんとは原作による未来予知（笑）なんだけどな

「すごいね、もしかして入試次席だったりして」

「違うわよエリカ。悠一君が本当の入試1位なの」

「え！でも新入生総代の答辞やつてたの深雪だよね？」

「あー、人の前でスピーチとか苦手だな。真由……七草会長に無理言つたんだよ」

レオ、美月が驚く。達也は何故かずつと疑いの目を向けていた。
……まさかもう勘づいている？…んなわけないか

「あの、ここで話すのもあれですし、みんなでどこか寄り道しませんか？」

「賛成、じゃあ駅の近くにクレープ屋があるからそこに行こう！」

「お前つてほんと色気より食い気だよな」

エリカとレオの痴話喧嘩が始まる。仲がよろしいことで。

反論は無く皆でクレープ屋に向かった。

「ちなみに私達に嘘ついた罰として悠一さんは全員におごりだから」

「え、雫!?それは雫とほのかだけじゃ……………」

「悠一さんは全学年全員に嘘ついた。むしろこれだけで済んでよかつたと思うけど」

雫さん、そんな悪い笑顔で言わないでくれ！キャラ違うから！

「お、それじゃあ」

「悠一くんに」

「ゴチになりまーす！」

変なところで息ぴったりじゃねえかお前ら！

「悠一くん、ありがとうございます」

「すまないな悠一、甘えさせてもらう」

ブラコン&シスコンの二人！そんな威圧出しながら笑顔で言われたら何も言えねえだろうが！

「ありがとうございます空閑さん」

美月の純粋な一言で俺は諦めた……………

今全員のクレープの代金を払ってる。まあそんなに対した金額じゃないからいいけど……………イチゴクレープ旨いなあ

後ろでは深雪のCADやエリカの警棒型のCADについて話している。確か…………兜割りの原理と同じって言ってたな。兜割りがどんなものかは知らないが。

払い終え皆の所に戻ると

「魔法科高校に一般人はいないと思う」

雫、おっしゃる通りです……………

「実際悠一さんも殆ど人間やめているようなものだし」

「それはいくらなんでもひどくないか？」

「入試で170msなんて出せる人は人間じゃない」

雫の言葉に俺とほのか以外は絶句していた。

「……………それなら納得だね」

「だな」

黙っているお前ら、もはや夫婦じゃねえか。

その後も喋っていると日が暮れそうになり、皆解散した。

「さて、今日もトレーニングやるか」

<達也&深雪視点>

「……………」

家に帰ってから達也はずっと黙っていた。深雪に入れてもらったコーヒーをたまに飲みながらずっと考え事をしている。さすがに心配し始めた深雪が

「お兄様、どうかなさいましたか」

と声をかけた。

「……深雪は悠一をどう思っている」

「どう、とは？」

「そのままだ。悠一を見て思ったことを言ってくれ」

「……………」総代を降りたと言った時は不真面目な人だと思いましたが、ちゃんと正直に理由を話してくれたので普通にいい人だと思います」

「ああ、確かに校門でのやりとりを見てもいいやつだと思う。だが……………」

「何か気になることでも？」

「声が似ているんだ。三年前に出会ったアイツに」

「！まさか」

「三年前、急に俺たちを爆弾から守るような行動をし、そしてそのまま姿を消した……「黒い悪魔」に」

深雪は達也が言ったことを信じられず呆然としている。

「ですが声が似ているだけなのでは？」

「声以外にもあの時の背丈が見た感じ同じだったんだ。だが、悠一は髪が黒かった」

「確か「黒い悪魔」の髪の色は」

「白だ。髪が黒から白になることはあるかもしれないが白から黒になることはまずない」

「魔法で髪の色を白く見せただけでは？」

「それはない、アイツは魔法を発動すらしてなかった。その他にも肉

眼では見えるが、エレメンタル・サイト精霊の眼で視ようとしたがあのマントに妨害されて見えなかったんだ」

「そんな……！お兄様の眼でも見えないなんて。そんな物実際に存在していたら」

「魔眼を封じるマント、またはその素材が反魔法師団体に知られれば

現代魔法社会の大きな危機となる」

「悠一については明日師匠に相談しよう」

「わかりました」

達也はベランダに出て、外の夜の空を見ながら思った。

「(悠一、お前は何者なんだ……?)」

＜悠一視点＞

「はあ、はあ、はあ、」

現在ラービットとの十本試合を終えた悠一は寝転がっていた。通算478戦251勝227敗。最近は勝ち越せるようになった。

「さすがにユーチでも疲れるか」

「はあ、あたり、はあ、まあだ」

悠一が毎日トレーニングしているのには理由がある。

いくらトリオン体が実弾に対して相性が良くても魔法は普通に喰らう。この世界でトリオンは生体エネルギーとして内部に存在するが、戦闘体や武器など実体化しているものは魔法の対象に出来ることをにっている。もちろん普通の魔法師には負けない、たとえ万の普通の魔法師が相手でも勝てるだろう。

……

そう普通、ならば

この国には十師族や数字付きなど手練れの魔法師がいる。さらに戦略級魔法師の達也や既に魔法師トツプクラスの實力を持つ深雪、それらが全員相手するとなったら結果は見えてくる。

100%負ける。

だから身体能力向上の他にも魔法についての練習も欠かさずやる。もしも、全世界を相手にしなくてはならない時の為に。

「……さて風呂入って寝るか」

ちなみに悠一が布団を被って寝るまでの時間はわずか0.05秒である。

魔法を発動するより早いと呆れるレプリカであった。

生徒会　そして……………

リメイク済み

いつも通り朝起きて自分で朝食を作り、家を出て学校に向かう。学校までの通学路を歩いていると目の前にシスコン＆ブラコンの深雪と達也が歩いていていた。

「おーい」

「、おはよう悠」

「おはようございます悠くん」

なんか達也が俺に返事するまで少し間があったような……………

「二人ともおはよう。それにしても一緒に登校なんて随分仲が良いんだな」

「、？普通じゃないか」

「いや年頃になると一人で登校したい、とか思わないのかなって」

もちろん深雪が達也にゾツコンなのは知っているがあえて言う。

「別に俺はそうは思わないな」

「私もです、お兄様が嫌と言うのであれば一人で行きますが……………」

「そんなこと言うはずないだろう、俺はお前と一緒にがいいよ」

「／／／そうですか……………」

おー、なんとという甘い雰囲気。ゴチソウサマ。

その後エリカ、レオ、美月と出会い校門辺りを過ぎようとしたら「たーつーやくくん！ゆーいーちーくくん！」

なんだろう……………この展開……………

「達也くん、悠くんオハヨ。深雪さんおはようございます」

「あの七草会長、何か俺たちの挨拶だけ可笑しかったような」

「気にしない気にしない。それと」

真由美さんは顔を近づけて

「真　由　美！」

「……………はい、真由美さん」

「ふふ、よろしい」

「で、俺たちに何かあるんじゃないですか」

「三人とも昨日のこと覚えてる？」

「確か昼休み生徒会室に來い……でしたっけ」

「そう、生徒会室にはダイニングサーバーもあるから昼飯もそこで取れるわよ」

「俺は弁当なんでどこでもいいですけど、深雪と達也はどうする？」

「お兄様いかがいたしましょうか」

「深雪の好きにしていどうぞ」

「私はお兄様に従います」

「もつとわがままになっていいんだぞ」

その辺にしてくれませんかねお二人さん、ラブラブ過ぎてエリカとレオは呆れてるし美月に至っては「応援してます……／／／」なんて言ってるし。

「でしたらお言葉に甘えさせてもらいましょうか」

「それでいいよ。会長、俺たちも生徒会室で食事をさせて貰います」

「わかったわ、それじゃあまた昼休みに」

真由美さんは駆け足気味に走っていった。

「さて俺たちも行くか……」

「ところで悠一くん、いつ生徒会長さんと仲良くなったの？」

エリカがニヤニヤしながら聞いてきた。

「あれが仲良いように見えるのか」

「」「見える」「」

「………そんな満場一致で言うほどか？」

「だって名前で呼んでたし」

「それはあの人が呼んでくれと言ったんだ」

「だが昨日の七草会長とのやりとりを見れば恋人と言われてもおかし
くはないぞ」

まさかの達也からの追撃

「恋人って、達也と深雪も人のこと言えないと思うが」

「？何故だ」

「……はあ、やっぱなんでもないわ。この超絶シスコンが」
「何か言ったか？」

「何でもない。それよりもうHR十分前だ、急ごうぜ（顔恐いぞ、達也）」

皆があ、と気づき走ってそれぞれの教室に向かった。

「ふうー、間に合った」

五分前に教室に着いた。

「悠一くんのせいで遅れそうになりましたね」

「半分は深雪と達也の恋人会話のせいだと思うが」

「／／そんな、恋人なんて……／／／／」

「……………そこは怒らないんだな」

自分の席に座ろうとすると

「おはよう」

相変わらずの無表情の雫がいた。

「おはよう雫」

「今日は少し遅かったね」

「どこかのブラコンのせいで遅れそうになった」

「??……………ああ、なるほど」

「今のでわかったのかよ」

「わかる」

その瞬間チャイムが鳴り、そして担任の先生が入ってきてHRが始まった。

昼休み

俺は深雪と途中で合流した達也と一緒に生徒会室に来ていた。

俺、達也、深雪の順で座り、向かいには市原先輩、渡辺先輩、中条先輩、ホスト席に真由美さんが座っていた。

今はダイニングサーバーで頼んだ料理を待っている間に俺たち1年の軽い挨拶が終わったところだ。

「次はわたしたちね、改めて私は今期生徒会会長の七草真由美です。私の隣にいるのは会計の市原鈴音、通称リンちゃん」

「私のことをそう呼ぶのは会長だけです」

確かにリンちゃんはない……………

「その隣は知ってるだろうけど風紀委員長の渡辺摩利」

「よろしく」

「その隣が書記の中条あずさ、通称あーちゃん」

「会長……………お願いですから下級生の目の前で『あーちゃん』はやめてください……………」

「よろしくお願いします、あーちゃん先輩」

からかい気味で言った。

「ほらー！さっそく言われたじゃないですか」

怒ってる姿が愛くるしい、この人のファンクラブとかありそうだな

「悠一、先輩をからかうのは良くないぞ」

「すいません中条先輩、少し調子に乗りました」

「……………」

「中条先輩？」

「……………先輩と言われた……………」

そこ!?!と心のなかでツツコミをしてみました。

するとダイニングサーバーから音楽が流れ、ひとまず昼飯を取りながら話すことになった。

ダイニングサーバーで頼んだ料理が俺と渡辺先輩以外に行き渡った。俺と渡辺先輩は弁当を持参している為頼む必要はなかった。

「そのお弁当は渡辺先輩が作られたのですか？」

「そうだが……………以外か？」

「いえ、少しも」

「……………そうか」

だったらそんなこと言うなよ達也。

「わたしたちも明日からお弁当にしましょうか」

「深雪の弁当はとても魅力的だが食べる場所がね……………食堂だと目立つから」

「そうですね、まずそれを探さなければ……………」

「でたよ、夫婦（みたいな）会話。」

「ところで悠一くんの弁当も自分で？」

あれ真由美さん？ここは市原先輩の爆弾発言投下するところじゃ

……

「そうですよ、昔から自分で作っていましたから」

「昔からって……………ご両親は共働きなの？」

「いえ、両親はいません」

「あ、……………ごめんね」

「いえ、大丈夫です」

一気に部屋の空気が重くなる、なんかすいません。

この世界での俺の戸籍は親と親戚はいないということになっていく。細かいところは神様の力でなんとかしてくれるらしい。

その重い空気を変えるため真由美さんが深雪を生徒会に誘う、しかし生徒会に二科生は無理だと言われ落胆するが、渡辺先輩の風紀委員会なら二科生でも入れることが分かり、真由美さんと深雪のダブルプレーにより達也の風紀委員会入りが確定した。ところで……………

「あ、ところで俺は何故呼ばれたのですか」

「君にも風紀委員会に入ってもらおう」

なんとなく予想していた答えだった。

「……………やっぱりですか」

「当然だ、君は実技で過去最高記録を叩き出したんだ、実力は十分にあるだろう」

「まあ俺も入ってみたいと思っていましたからね。引き受けますよ」

風紀委員や生徒会に属する生徒はCADを携帯することが認められているので俺としては入りたかったのだ。

「そうか、これで晴れて風紀委員に……………と言いたいところなんだが

……」

「はんぞーくんの意見を聞いていないからね……」

ああ、やられフラグを立てまくった先輩か。

「ごめんね、三人とも悪いけど放課後また来てくれないかしら」

真由美さんの言葉に全員縦に頷く。

達也の実力を間近で見れるから少し楽しみになってきた。

放課後

「兄の実力を確かめずにペテンなど誹謗されるのはいささか乱暴過ぎるではありませんか」

現在達也のことをバカにされ、怒って服部副会長に反論している深雪。

「実力は入試で審査している、あなたは優秀な方なのだから身びいきに目を曇らせぬように気をつけなさい」

「身びいきなどでは……っ」

「服部副会長」

「俺と模擬戦をしていただけませんか？」

さすが達也。深雪のことになると雰囲気変わるな。

「……いいだろう、身の程を弁えさせてやる……!」

こうして達也VS服部副会長の模擬戦が始まろうとしていた。

場所は変わり、第三演習室で行うことになった。

渡部先輩の合図と共に開始した……が、一瞬で達也が服部副会長を戦闘不能にし、勝利を勝ち取った。今周りの人たちからの質問責めに合っている中、俺は達也と戦うことを想定して考えていた。

「(つか、あの近接戦闘の前に雲散霧消をどうにかしないとイケないけど、それは術式解体グラム・デモリッションでなんとか出来るか……いやそれよりも厄介なのは「再生」だな。こっちがいくら瀕死状態に追い込んでも

サイオンが有る限り無傷だ、こつちがガス欠になる)」

「おーい、悠一くん」

渡部先輩に呼ばれていることに気づかないまで集中してしまったらしい。

「どこか具合でも悪いのか？」

「いえ、考え事をしていただけです」

「そうか、よし、それじゃあ生徒会室に戻って…」

「待ってください渡部先輩」

「どうした、達也くん？」

「まだここの演習室を使うことは出来ますか」

「ああ、後20分ぐらいなら」

「では使わせていただけませんか」

「私はいいが、真由美はどうだ」

「わたしもいいけど………何に使うの？達也くん」

「あともう一試合やりたい相手がいます」

「なんだ？私なら受けてたつぞ」

「渡部先輩ではございませんよ。………悠一」

「俺と模擬戦をしてくれないか」

空閑悠一VS司波達也 リメイク済み

「……何で俺なんだ？」

「入試1位とやらの実力を見てみたくてな」

成る程、確かに入試1位ということは深雪より実力があるからそれを確かめてみたいと。だがな達也……………

「少しだけ嘘だな」

「!!」

おー、さすがに驚いてる。普段からポーカーフェイスだからそれほど大きく表情には出てないけど驚いてるのは分かる。他の人は分からないといった表情でポカンとしていた。深雪以外は。

残念だったな達也、俺には「嘘を見抜くサイドエフェクト」がある。何気ない会話だったら使わないけどこういうときには使うぞ。

「……まあ、俺も模擬戦見たら戦ってみたって思ってたからいいけど」

「……………そうか」

警戒心MAXだな、帰り道に九重さんついてきそうだけど調べられることなんて何もないから問題なし。

「じゃあCAD取ってくるから少し待っていてくれ」

俺は走ってCADを取りに行った。

<達也視点>

「達也くん、さっきのは嘘だったの？」

「いえ、自分としては本心のつもりで言っただけなんですけど」

「そう……………」

確かにさっきのは一部だけ嘘だ。俺が悠一に模擬戦を挑んだ理由はいつが「黒い悪魔」かどうか確かめるため。俺はあの日からずっと考えていた。見たこともない力、エレメンタル・サイト精霊の眼を封じるマント、だが、なによりあいつが俺たちの日常を邪魔する存在だと分かれば

消す

<悠一視点>

CADを取りに行った悠一は廊下を走って戻っていた。

「さーて、どうするか」

達也間違いないく俺を疑ってるな。勿論こんなことでトリガーなんて使わない。そもそもトリガーはトリオンを使ってるからな、反則以前にデバイスオタクの中条先輩や達也に詰め寄られるだろう。

達也との模擬戦は俺もやりたかって思ってた。今の俺がトリガーなしでどこまで達也とやれるか知りたい。

今のところ「ニブルヘイム」、「フオノンメーザー」などの高等魔法もなんなく発動できるが今回は使わないで、硬化魔法を常に発動して、牽制に「ドライ・ブリザード」とか使うか。

「お待たせしました」

演習室に到着すると皆俺を見ていた。正確には俺の両手を。俺は汎用型のCADを両手につけている。理由は………まあ念のためだ。

「待たせたな達也」

「いや、大丈夫だ。それにしても……二つ使うのか」

「一応念のため、って感じかな」

「それでは両者所定の位置に」

この試合も渡辺先輩が審判を務めるみたいだな。たぶん間近で見たいかという理由だろう……

達也は俺をジーンと見ている。そんなに見つめられても………

やめておこう、これ以上そんなこと考えたら氷漬けにされる。

「(さて達也はどんな手でくるかな)」

「(お前が何者なのかは今は知らないが、深雪を上回ったその実力見せてもらおうぞー)」

「それでは…始め!」

達也は服部先輩の時と同じように忍術で間合いを詰めてきた。俺の右に移動すると左足で横腹を蹴ろうとする、すぐさま硬化魔法を發動して全身を硬化させ、それを両手をクロスにして防いだ。

「…! (思ったより重いな!)」

「ほう…まさか防がれるとは思ってなかったな」

「今のぐらいいだつたらまだ見えるよ(当たり前前だ、こちとらラービットの速さに見慣れてるんだよ)」

「それにしても試合の途中に喋るとは余裕だな達也」

「驚いたからな、つい喋ってしまった」

「そうか…よ!」

左足をはね除け、左手で殴る。

それを避け、殴り返してくる。

そして、避け、殴り、蹴るの格闘戦が5分ぐらい続いた。

このままではらちがあかないため、悠一は一旦距離をとった。

「ふうー」

「悠一、硬化魔法以外も使ったらどうだ」

「あの状況で他の魔法使う余裕ないだろ」

「お前なら余裕なはずだ」

「なんでだよ」

「入試の実技の記録を聞いたらそう思っただけだが」

「…買い被りすぎだと思うけどな、そんなこと言われたら使わせてもらおう!」

俺は真由美さんが得意としている魔法「ドライ・ブリザード」をマシガンのように打った。この魔法では達也相手では牽制ぐらいが精一杯だろうが、魔法の発動速度には自信があるので体制を崩すのは十分。

「…! (展開が速い!)」

達也は避けるが距離を離されてしまう。それが俺の狙いだ。室内の端の方へ誘導して俺は片方のCADで圧縮空気弾を30発放った。圧縮空気弾とは九校戦で一条将輝がモノリス・コードで達也との打ち合いに使った魔法だ。

勿論威力は当たっても打ち身ぐらいの威力にしている。

だが「ドライ・ブリザード」のマシンガン、圧縮空気弾の雨が降り注ぐのに対して達也は回避を取れず直撃した。

さて、動きを封じて決着を…

「な、…い」

達也は先程の攻撃で出来た煙から出てきて真っ直に俺に走ってきた。しかも無傷で。

「(ありえない、いくら威力を加減したからといっても多少の怪我はともかく服まで…)」

しかしの疑問はすぐ解決した。達也が持っている固有魔法の存在によって。

「(あの一瞬の間に「再生」で無傷の状態に戻したのか!つかいくら固有魔法といっても早すぎるだろ!)」

すぐにもう一度「ドライ・ブリザード」を発動しようとCADを構えるが

魔法式がサイオンで吹き飛ばされた。

「これって……グラム・デモリッション……術式解体か!」

達也は銃型のCADをこちらに向けながら距離を詰めてくる。

「(これじゃ牽制は使っても意味ないな、まったく)」

「達也、お前やつぱりすごいな」

つい笑って言ってしまった。

「!!(なんだ、この殺気は!?)」

悠一は右手にサイオンを集め、魔法で加速する。達也の攻撃を避けてカウンターで一気に終らせるためだ。

達也と悠一お互いの距離が間合いに入ろうとした瞬間…

「そこまで!時間切れによりこの試合引き分けとさせてもらおう!」

渡辺先輩の声が室内に響き渡る。

「時間切れか」

「そのようだな」

俺は右手にサイオンを集めるのをやめ、達也はCADをおろした。

「真由美さん、この後は生徒会室に戻るのですか？」

「え、ええそうよ」

「俺は事務室にCADを預けてから向かうので先に行ってください」

「自分も預けてから向かいます」

「そんじゃ行くか達也」

「ああ」

達也と一緒に俺は事務室に向かって歩いた。

<真由美視点>

「…摩利、ありがとうね」

「さすがにあれは止めなければまずいからな」

摩利が試合を止めたのは時間切れじゃなくて、あのまま続けていたら互いに…主に達也くんが重傷を負う危険性が強かったから。

達也くんが術式グラム・デモリッション解体を使ったことには驚いたけど、何より悠一が笑った時が一番驚いた、というよりも怖かった。

悠一くんから出てたのは威圧では無くもはや殺気。わたしは家の関係上人を殺したことがある人を何人も見てる。殺人をした人ならではの雰囲気、あのときの悠一はそれに近いものを出していた。

「はわわわわ……………」

「落ち着いてください中条さん」

「深呼吸だ中条」

ビクビクしているあーちゃんをリンちゃんとはんぞーくんが声をかけているけど二人の顔に汗が浮かび上がっていた。

「……………」

「深雪さん、大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

冷静そうに見える、けど何か考え事をしているようにも見える。

「みんな、とりあえず戻りましょう」

とにかく家に帰ったら調べてみよう、彼のことを。

<悠一視点>

俺たちはCADを預けると生徒会室に戻った。

俺が部屋に入ると中条先輩が市原先輩の後ろで怯えながら俺を見ていた。

「あのく中条先輩？」

「は、はい！なんですか！わたしなんて食べてもおおいくないですよ！」

「いや、何を言って……………」

「ごめんなさい、ごめんなさい、何でもしますから食べるのだけは！」

そう言いながら土下座をした。

「え、えええ？」

「あー、ごめんね、悠一くん。あーちゃんさっきの試合の悠一くん見て恐がってるみたい」

あははと苦笑いをする真由美さん。

「俺……………そんなに恐かったですか？」

「特に最後のあの威圧がね。わたしも冷や汗かいたわよ」

「…まじですか」

俺はかなりシヨックで膝をつく。

「そんなにシヨックだったの？」

「悪意のない恐れが一番嫌なんですよ、特に中条先輩のような純粋で可愛い人からは特に」

「え、わたしが？可愛い!？」

「はい、可愛いですよ」

「！……………ふにや／＼／／」

「中条さん!？」

中条先輩は顔を赤くして市原先輩にもたれかかるように倒れた。

「悠一くん、少しストレート過ぎじゃないか」

「?だって事実ですし」

「だからといって……………あのような言葉は好きな人に言うべきだ」

「可愛いと思ったから言ったただけですよ」

「(あー、これは鈍感だな(わね))」

渡辺と真由美はそう思った。

「ん。さて、達也くんと悠一くんは風紀委員会本部に行こうか」

渡辺先輩……………これからは委員長と呼ぼう。

委員長に連れられて俺たちは生徒会室にある非常階段から本部へ向かった。てか消防法どうした。

部屋は……………まあ男だらけということもあり、整理整頓がきちんとされているはずもなく、俺と達也で片付けをし、終わった後二年の沢木碧先輩と三年の辰巳鋼太郎先輩が入ってきて軽く自己紹介をした。先輩たちは実力を見て人を判断するようなので達也に対して優越感を見せつけるようなことはなかった。この人たちとなら上手くやっていけそうだ。ただ、辰巳先輩は委員長のことを「姐さん」と呼んで委員長に頭を叩かれていたことが、少し面白かった。

それからCADを取りに行き俺は一人家に帰った。

自宅

「ユーイチ」

レプリカが指輪からニュッと出てくる。

「なんだレプリカ? そういえばお前今日学校で俺と喋ってなかったな」

「少し用があつてな、そのことで話したいことがある」
「何？」

「今日九重八雲がユーイチについて調べていた」
まあ何となく予想はしていたけど。

「調べられたことは？」

「ユーイチの経歴や住所が主にだな。この家にも来たが敷地内には入ってきていない」

「まあ、入ろうとしても無駄だからな」

実はレプリカと一緒に玄関のドアや窓ガラスの全部をトリオンで作ったのだ。トリオンなら魔法で無い限り破壊されることはまずないし、魔法でも難しいだろう。達也の「分解」みたいなのは除いて。

「それと今日の試合のような殺気を出すのは控えた方がいい」

「俺殺気なんか出していたか？記憶にないけど」

「試合の終盤タツヤに攻撃しようとしてサイオンを集めていた時だ。無意識だから気づかなかつたのかもしれないが」

「成る程、だから中条先輩怯えていたのか（それだとしても少しシヨツクだったけど）」

「それに今分かったがマユミも調べているみたいだ」

「真由美さんが？あの十師族だから情報力高いからなく、まあ多分大丈夫だろう」

「今のところはな、ところでユーイチ。今日はどうする」

「今日もやるよ。あの印は必要になるときが来るはずだから」

俺は今日もレプリカと一緒に開発室に行く。

<達也視点>

自宅 リビング

「お兄様、コーヒーをどうぞ」

「ありがとうございます」

妹が淹れてくれたコーヒーは苦くもなく甘くもなくちょうどいい味だ。

「美味しいよ」

「ありがとうございます」

「…深雪話してごらん」

「……………やっぱり、お兄様は何もかもお見通しですね」

「お前がさつきから一人で考え事をしているのはすぐ気づいたからな。大方悠一のことだろう」

「はい……………今日の試合でお兄様に放とうとした最後の攻撃…」

「ああ、確かにあれはまずかったな。もし当たっていれば体を貫通していただろう」

「…！それは、お兄様を殺そうとしていたのですか!？」

「いや、違う。確かに悠一から出ていたのは殺気だが本人にその自覚がなかったように見える。恐らく無意識に出ていたのだろう」

「そうですか……………」

「とにかく明日師匠のところに行けば何かわかるはずだ。最悪の場合……………叔母上にも伝える」

「…！それでは叔母様に借しを作ってしまったです」

「大丈夫だ。もし悠一が「黒い悪魔」だとすれば叔母上にとっても朗報となる。借しにはならないはずだ」

「……………私としては悠一くんとは仲良くなれそうな気がします」

「俺もだ。だがあいつが俺たちの日常を壊す存在ならその時は容赦しない」

リビングに静寂な空気が広がった。

<悠一視点>

「くくん！ようやく完成したな！」

「お疲れ様、さすがにもう12時だ。早く風呂に入って寝たまえ」
「そうする」

悠一が部屋を出るがパソコンは画面がついていたままだった。
そこには新しく作られた印の名前が表示されている。

決して戦闘用ではないがレプリカと合わせることで戦闘にも使える。この印の主な目的は達也たち疑われないようにするため。
画面にはこう書かれている。

【^{デコイ} 罠 印】と

昼休み

リメイク済み

<達也視点>

いつものごとく朝から師匠の所へ行く。今日は深雪も一緒だ。

そして寺に入ると師匠が一人門の近くに立っていた。

「おはようございます」

「おはようございます九重先生」

「おはよう二人とも、本当なら達也くんいつものやつてもらったよ。りだったけど……長話になりそうだから今日は止めておいたよ」

「わかりました」

「ここじゃあれだし場所を変えようか」

俺と深雪は近くにある小屋に案内された。

「それで………空閑悠一君のことなんだけど……はつきり言っただ普通だ」

「普通……何が普通なんですか」

「経歴、家全て………が。彼の親は魔法師であるがランクはBだけど父方の祖父がAで魔法の才能はそこからだろう」

「なるほど………（やはり俺の考えすぎか……？）」

「けどね、ひとつ気になることがあってね」

「気になること、ですか」

「彼は3年前に沖縄に旅行に行った記録があるんだ」

「三年前……まさか!？」

「そう、時期もあの大亜連合襲撃の時だ。しかもその数日後空港が使えて一番最初の便で本州に戻っている」

深雪は絶句し、達也はいつものポーカーフェイスが崩れている。だが達也はすぐ冷静になり

「実は昨日彼と模擬戦をしまして」

「ほう、それでどうだったんだね」

模擬戦のことについて九重に話した。

「……………まさかそこまではね」

「はい、ですが多少動きに無駄があるようなのでおそらく武術などは習っていないかと。厄介なのは身体能力と魔法の発動するスピードですね」

「では、本気でやったら彼には勝てるかい？」

「……………わかりません」

その質問は達也にとってすぐ出るものではなかった。

「君の本来の力でもかい」

「もし悠一が「黒い悪魔」ならあの奇妙な力も出してくるでしょう。そうなる情報が少なすぎます。今の段階ではなんとも」

「そうか…これからも僕のほうで色々調べてみるよ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます九重先生」

「彼には僕も興味があるからね。後深雪君」

「なんでしょうか」

「彼とは同じクラスだったよね、出来れば彼についてわかったら教えてほしい。勿論深追いはしないように」

「俺からも頼む。お前を使うようで悪いが」

「いえ、大丈夫です。何かわかりましたらすぐにお伝えします」

「ありがとうございます。気を付けてね」

「はい、ありがとうございました」

俺と深雪は一端家に帰って朝食をとり、学校に向かった。

<悠一視点>

1—A教室

「ふあくく、眠い…」

「悠一さん寝不足？」

「ああ昨日ちよつと遅くまで作業しててな」

印の製作に思ったより時間がかかってしまった。そもそも印は相手の攻撃を解析して作る方が早いが一から作るとなると何日もかかる。

「魔法師にとって体調管理は大事だよ」

「ああ、わかってるよ。大丈夫」

さて今日からは新入部員勧誘期間だ。初めての風紀委員としての仕事、忙しくなるぞ。

昼飯時

今日も生徒会室で真由美さんたちと一緒に昼飯を食べる。食堂みたい席に困ることがないのでここで食べることにしている。後、楽しいイベントも起こりそうだからであるが……………

そして達也と深雪がなんやら観察するように俺を見ている。そんなに見られても何にもないんだが

さて、今は新入部員勧誘期間について話している。

「今年も来ちやったか」

「そうだな、この時期は生徒会と風紀委員は特に忙しくなる、だがそれがあつたたちの仕事だからな」

真由美さんと委員長はため息をつく。

「ため息なんかつかないでくださいよ、幸せが逃げますよ。あ、委員長に関しては無限に幸せがあるから問題なしでしたね」

「?、どういう意味だ」

「だって朝から彼氏に愛妻弁当作ってきたんでしよう、指に包丁で切った傷が新しくできてますよ」

「な、!／／／／／そんなことは……………」

「そうなんですか? 幸せじゃないということとは委員長は彼氏さんを愛してないということですね」

「違う!! 私シユウを愛して…………あ」

委員長は俺に釜をかけることに気づいたみたいでみるみる赤くなっていた。

「あー委員長、ゴチソウサマデス」

「~~~~~! / / 悠一くん!」

「あはは、すみません。つい」

「摩利一本取られたわね」

真由美さんはニヤニヤしている。しかし委員長の彼氏への愛する宣言で少し顔を赤らめてした。……………もしかして恋愛経験ないのかな。

「うるさいぞ真由美」

「いいじゃない。摩利の可愛らしい顔見れたんだから」

そう言いながら茶を飲んだら

「~~~~! あーちゃん水! お水ちようだい!」

舌を出しながら涙目で言った。

「は、はい!」

「ん、……………はあ、はあ、はあ」

「お、おいどうした?」

「何でこのお茶すごく辛い?! お茶だよ! さっきまで普通だったのに」

「あ、俺が特性色無し唐辛子粉末を入れました」

「悠一君!」

「聞きましたよ、俺の入試結果深雪に言ったこと。その仕返しです」

「それにしても酷すぎない?」

「良くやった悠一君」

「会長にはこれくらいしないと大人しくしませんからね」

「摩利はともかくリンちゃん? 貴女まで私の敵なの?」

「私は常に公平な立場にいるつもりですが」

「いや、明らかに私に対して不公平だよね! いつも!」

いやあー。笑える。

「……………」

「あー、ところで達也? さっきから何で俺をジーっと見てるの。もし

かしてソツチ系だったの「違う」じゃ何で俺を見てるんだよ」

「いや、昨日と雰囲気が違うからな。以外だと思ったただけだ」

ふーんまた嘘か。これは本格的に俺を怪しんでいるな、何とかしておこう。

「いつもはこんな感じなんだよ。むしろ昨日の俺そんなに可笑しかったか？」

「正直言うと少し怖かったぞ」

「達也に怖いものなんてあるのか」

「誰にでもあるだろう」

いや嫉妬している深雪だろ。と言おうと思っただがそれは地雷なのでやめておく。……なんか寒気が……………

「さて」

委員長が話を切り出す。

「なんとか風紀委員のメンバーが、足りてよかったよ。何しろ一年間の中でこの新入部員勧誘期間が一番忙しくなるからな。頼りにしてるぞ二人とも」

「あまり期待しないでください」

「でも達也なら大丈夫だろ。な、深雪」

「当然です。お兄様の手にかかればどんな事件も解決できますから」

「だってよ」

「俺としてはお前の方が活躍しそうだがな」

「つつても俺には体術とかないからほとんど力づくになりそうけど」

昨日の試合で改めて対人近接戦闘の重要性を理解した。空手とか柔道やってみようかな。

「ところで委員長」

「なんだね悠一くん」

「一年って俺たちだけなんですか？」

「いや、教師推薦の森崎が入って一年は君たち含め三人だ」

まじかあいつか……………ん？

「委員長、達也は生徒会推薦、森崎は教師推薦、俺はどんな形で入るんですか」

「君は形としては部活連からの推薦として入ってもらおう。昨日の試合のことを十文字に話したら興味心身だったぞ」

「……………とうとう十文字家まで目をつけられたよ俺。これから先大丈夫か。」

「とりあえず放課後本部に集合。そこで役割を言おう」
「わかりました」

「さあて、頑張ろう。」

風紀委員初仕事

リメイク済み

放課後

「なぜお前たちがここにいる!」

現在森崎が達也と俺に向かって指をさしながら吠えている。なんか………こういうキャラって必ずこういうこと言う運命なのか?

「いや、それはさすがに非常識じゃないか」

そしていつものごとくクールに喋る達也。女子から人気あるのも納得だな。

「なんだと!」

「おい、新入り」

委員長が口を挟む。

「ここは風紀委員会本部、つまりここに来るのは風紀委員だけ、ならば二人がここにいる理由もわかるはずだが」

「は、はい! すいませんでした!」

直立不動の森崎君、面白い。

「さて、会議を始める」

会議とはこの一週間、新入部員勧誘期間について。勧誘と表向きでは言っているが先輩たちでは「新入部員獲得合戦」と言われ、委員長に至ってはバカ騒ぎの一週間となっている。………風紀委員長がそんなこと言っているのか?

会議では新しく入った俺たちに三人の自己紹介から始まり、今回の担当について委員長が言った。

各風紀委員は主に一人で校内を巡回する、これだけだ。ただ、一年にいきなり一人でやれと言うのは少し驚いたが、委員長の度胸の大きさによるものだと思つた。

会議が終わると先輩たちは先に行き、俺たちには腕章とビデオレコーダーを渡された。ちなみにビデオレコーダーは違反行為の証拠になるため巡回の時は常に持っていくように言われた。そして軽い説明を受けた後俺はすぐに巡回に向かった。なぜって? もちろん

ん森崎と達也のやりとりを見ていたら俺にも飛び火が移りそうだったから。ちなみに達也は見えなくなるまで俺を睨んでいた………怖えよ。

さてさて、今現在の状況を説明しよう。

巡回に戻っていた俺は、過激な部活勧誘を見つけるとすぐに被疑者を拘束し風紀委員の先輩に任せた。これを大体十回ぐらいの繰返し。ちなみに魔法は使わず関節を極めたらなんとかなった。いちいちモブに魔法使うのもめんどくさいからな。んで、引き続き巡回を続けていると……

「生まれ！萬谷、風祭！過剰な勧誘行為は禁止されているぞ！」

委員長の怒鳴り声が聞こえた。見てみると、鬼の形相をしてスケボーみたいなのに乗っている委員長と、同じくスケボーに乗って、二人の女性が人を抱えてながら逃げていた。

目を凝らして抱えられている人を見ると………

「止めて止めて、止めて！」

「目が回る……！」

ほのかと雫だった。

「何やってんだあいつら。てかこんなこと原作に書いてあったっけ？」

余談だが悠一は劣等生の方は読んでいるが、番外編の優等生の方は見ていないのでそっちの展開は分からない。

「まあ、とりあえず委員長に聞きますか」

俺は魔法を使わずに走った。使わずに走っても50m4秒の記録を出せるほど足は早いので問題ない。

あつという間に委員長に追い付き。

「委員長、何があつたんですか？」

「悠一くんか……って君！魔法を使わずに走っているのか!？」

「そうですよ。人間努力すれば魔法なしでもこれくらいは誰でも出来ます」

「それは君だけのような気がするが………」

気にしない。

「それで、何があつたんですか？ほのかと雫が拉致されている光景に見えますけど」

「そのまんまだ。今逃げているのはよろずやさつき萬谷颯季とかざまつりすずか風祭涼歌、二人とも去年卒業したバイアスロン部のOGだ」

「へえ………つて卒業生!?なんでこんなところに?つかなんで雫たちを拉致してるんですか?」

「あたしが知るか!とにかく、捕まえて吐き出させる。悠一くん、手伝え!」

「まあ元よりそのつもりですがどうします?」

「……あの二人は相手の妨害に関しての魔法が得意………出来れば萬谷たちを封じ込めれるといいんだが………」

悠一は少し悩んで一つ思い付いた。

「なんとかなりますよ」

「………確率は?」

「100%です」

問いに即座に答えた悠一に摩利は一瞬キョトンとして笑った。

「あはは!まさか100%が出るとは思ってたぞ。………いいぞ、やってこい!」

「了解、です!」

俺は自己加速術式を使いあつという間にOGの前に立ちふさがる。元々の足の速さ+魔法による加速により音速にちかい速さで移動することが可能になった。………なんかニルフフとか言いうタコを思い出したがそれは隅に置いてく。

「止まってください!風紀委員です!」

「悠一さん!?助けてください!」

「悠一さんナイスタイミング」

とりあえず雫たちは大丈夫そうだな。

「おお!まさか追いつかれるとわね」

「でも、ごめんね。来るならお姉さんたち本気で迎え撃つから!」

「どうぞ自由。ああ雫、ほのか」

「力づくでやるから多少の被害は許してくれよ」

「え？」

やることは単純。俺は術式解体グラム・デモリッションで萬谷先輩たちが発動している魔法を吹き飛ばし、スケボーの下から上昇気流を発生させ、まとめて空に飛んでいった。

「きやああああ!!」

「委員長半分お願いします！」

「君は見かけによらず強引だな！」

俺と委員長で4人をゆつくり降ろし、萬谷先輩たちはすぐに逃げようとしたが委員長に捕まってそのまま連行された。残ったのは放心状態のほのかと相変わらず表情が読みにくい雫だ。

「ふわああく怖かった！」

「悠一さん、少し乱暴」

「悪い悪い、でもおかげで助かっただろ？」

「そうだけど……それに」

俺を少し睨みながら

「下から私たちの下着見てたくせに」

「え、えええ！」

「いやいや、見てないから！」

「じゃあ私のは何色？」

「黒なんか履くのは少し以外だった……って、あ」

「……………嘘つき変態入試1位」

「変なあだ名はやめろ！」

「も、もしかして、わたしのも見たんですか!？」

「見てない!ほのかは角度的に見えなかったから」

「見るつもりだったんだ」

「違う違う!そんなつもりはございません！」

「…ふう、今日から1ヶ月私の命令を必ず聞く。それでゆるしてあげる」

「いや雫さん?それだと雫がS系女王様にみたいになるのでやめたほうがいいかと……………」

「しょうがない。生徒会長に報告を…」わかりました。お願いします
それだけは」ならいい」

「さっそくだけどこれを返しに一緒に来て」

萬谷先輩たちが使っていたスケボーが忘れ去られて置き去りにされていた。

「わかったが、一緒に行くのか?」

「うん、バイアスロンに少し興味が出たから」

「じゃ行くか」

「うん」

俺たちはバイアスロン部に返しに行くために歩き始めた。

「……………あれ?これわたし空気扱い?」

ほのか……………すまん。

雫たちとバイアスロン部に行き、雫はそのままバイアスロン部に入ることになった。ほのかは雫と部長に押しきられる形で入ることになった。そんなのであいつは大丈夫なのだろうか……………?俺も入らないかと言われたが風紀委員があるので断った。勿論風紀委員をやりながら部活に入ることは禁止されてはいないが、俺の場合家の開発時間を1秒でも必要なため、なるべく家にいたいのだ。雫は俺が入らないことに残念な表情になったがなんでそんなことになったかはわからない。何でだろう。

さて、この調子で勧誘期間も無事に終わらせることが出来そうだと思っていたが、二科生の中に赤と青で縁取られたリストバンドを付けている生徒を何人か見つけた。

「(エガリテ……………確かブランシユの傘下みたいなものだったけ)」

ということは今もうすぐテロが起こるということだ。

「出来るだけ急ぐか」

今の悠一でも普通のテロリスト相手なら何にも問題ないが全て原作通りにはいかない。念には念を、だ。

「とりあえず本部に戻るか」

特になにもなく、悠一は帰った

劣等感

リメイク済み

数日後

新入部員勧誘期間が終わりいつも通り生徒会室で昼飯を食べていたとき

「そういえば達也くん、君が剣道部の壬生紗耶香をカフェで言葉責めにしたのは本当かい？」

「言葉責め!？」

深雪は驚き、真由美さんは目をキラキラさせていた。この人、人のいじり楽しんでるだろ。

「誤解はやめてください委員長。それに下品な言葉遣いは妹の教育によろしくないのですよめてください」

「あの、お兄様？私の年齢を勘違いされてませんか」

「いやー、さすがのシスコンだな達也」

「そうなのかい？だが昨日壬生が顔を真っ赤にして恥ずかしがっている様子を見た人がいるんだが」

委員長もいい性格してるな。

「あれはどういう「お兄様?」

「いったい何をしてらっしゃったのですか……………?」

室内に冷気が広がる。寒いな。

「し、CADも使わずに魔法を……………」

あーちゃん先輩ビクビクしてるし。

「よっぽど事象干渉力が強いからね」

真由美さんが凍ったお茶を逆さまにしたり、つついている。

「すまん、悪ふざけがすぎた」

だったら最初から言わないでくださいよ。

「落ち着け深雪、ちゃんと説明するから」

達也が深雪を宥める。

「強力な魔法は超能力に近いと言われている。さすが自慢の妹だな達也」

「ああ、だが夏に霜焼けするのも困りようだがな」

「すいません、お兄様」

「気にすることは無い。少しずつやっていけばいいさ」

「そうそう、誰でも最初から出来るやつはいないって」

「……………悠一以外はな」

「待て、なぜ俺を省く」

「まあ、悠一くんならそう思えるな」

え、委員長？

「そうね、悠一くんならね」

ちよつと真由美さん?!

「私も悠一さんなら……………」

あーちゃん先輩?! 地味にシヨック。

「と、とりあえず達也昨日のこと教えてくれないか」

俺は無理矢理話の流れを変えた。

達也が言ったことは原作通り。壬生先輩は二科生に対する差別について不満に思い、非魔法師クラブで連携をとり、魔法だけが全てではないという考えを学校に伝えること。達也はこのことに「ブランシュ」が関係していると真由美さんたちに伝えると生徒会の方でもそれは確認されているらしい。まあ、あーちゃん先輩だけは知らなかったが……………

ともかくこのまま行けば校内でテロが始まり、達也たちが解決、という流れになるが俺は原作を少し改編させてもらう。

改編といってもまあ、あれです。ブランシュのリーダー……………誰だったけ? そいつに徹底的にトラウマを植え付けることだ。

理由は壬生先輩たちに施した催眠魔法。勿論、催眠を受けた一年は無断じゃなくても、わずかな期間人の人生を変えた罪ははるかに大きい。正直腸が煮えくり返る。それに、確か向こうはキャストジャミングの使用するための鉱石「アンテナナイト」をいくつか持っていたはず、それもいただこう。あれは解析して、隠密系に利用出来るはずだ。

ブランシユの話についてはここまでということになり、放課後、風紀委員の資料作りを終わらせ急いで家に帰った。

今俺がいるのはトリオンで作られた仮想空間。真っ白で正方形みたいな構造だ。

「レプリカ、ラービットを10体、モールモッドを30体、バンダーは50体頼む」

「多すぎないか？印なしではきついぞ」

「大丈夫、今日使うのはこれだから」

「なるほど、了解した。それではトリオン兵を出すぞ」

目の前にぞろぞろと現れるトリオン兵、だが負ける気は微塵もしない。

「そろそろ出番あるかもだからな。んじゃ……………」

「風刃…………起動!!」

魔法科高校の美少女探偵団

リメイク済み

「まったく委員長は……………」

～回想シーン～

「うーむ」

「どうしました、委員長」

パソコンを見つめながら悩んでいる委員長。俺はそれを不思議に思っただけで声をかけたことが事の始まりだった。

「悠くんか。いや実はなどうにもパソコンの調子が悪くてな」

「どれどれ……………って委員長、こんなに容量キツキツだったら重くなりませんよ。ちゃんとデータ移行して容量を空かせないと」

「そ、そうなのか？」

「……………まさか全般的に機械が苦手とは言いませんよね？」

「そんなわけないだろう！こう見えてもあたしは三年だぞ」

「いや、そこは関係ないような……。てかこの間真由美さんから委員長自分のCAD調整できないって聞きましたけど」

「う、……………」

「はあ。こっちは俺がやるときですから委員長は茶でも飲んでください」

「そしたらあたしの仕事がなくなるだろう」

「じゃあ掃除でもしてくださいよ。最初来た時にも思いましたけど家事の内には掃除も含まれてますからね。掃除出来ない女子は彼氏と上手く行きませんかよ」

「な、な、……………悠くん君はあたしを怒らせたようだな」

「え？」

「そこで見てるんだ！あたしが一人で掃除ぐらい出来ることを証明してやるー！」

そう言うと委員長は手当たり次第掃除を始めた。

「……………(いや、それが普通なんですけどね)……………」

悠一は静かにそう思った。

く数分後く

「よし、もう少しで終わるな。にしてもさっきから後ろの方でなんかドタバタしてるけど大丈夫か?」

すると

バキッ

「……………」

振り返ってみるとタブレットが床に落ちていて、冷や汗(本当は見えないはずだが)をかいている委員長が固まっていた。

「何をしてるんですか委員長」

「すまん……………つい手がすべって……………」

「まったく、これ大丈夫かな?」

悠一はタブレットの電源を試しにつけてみる。タブレットはピカッと画面が明るくなるがすぐに消えた。

「……………あれ?」

何度も繰り返しやっても一度はつくがすぐに消えてしまう。

「あちやー、これ壊れましたね。仕方がないから捨てましょうか……………どうしました委員長?そんな顔をして」

委員長はやってしまったと顔で表現している。

「……………実はそれには過去の風紀委員の活動の記録全部が入っているんだ……………」

「ちなみにバックアップは?」

「あたしがそんなことすると思うか」

……………あれ?これって詰んだ?

「何をしてるんですか!?!いやまずそんな大事な物なら大事に保管しておいてくださいよ!」

「うう、そう言われると何も言えない…」

「どうかしましたか？」

達也がいいタイミング部屋に入った。

「ちようどいいときに来た達也！頼むからこれを直してくれ！」

「あたしからも頼む！達也くん！」

「は、はあ」

達也に見てもらおうと中の部品の一部が壊れているだけなのでその部品を俺が買うことになった。委員長が行くべきだって？委員長はよほどのことがない限り委員会活動中は学校の外に出るべきではないんだと。そういうことで俺が買い出しに行くことになったというわけ。

く回想シーン終了く

「もとはといえば委員長のせいなのに」

文句を言いながら目的の店に入ろうとするが

「ん？あれは」

何やら尾行しているような三人組が目にとどまった。

「ほのかと雫と……ああ、確か明智英美さんだったっけ」

雫とほのかと一緒にいる赤い髪の女子は明智英美。本名はアメリカン・アール・英美。明智・ゴールディで、俺たちの世代では珍しいクォーターだ。「砲撃魔法」を得意としていて原作では九校戦ぐらいしか出番はなかったはずだけど……

「何を見てるんだ？」

視線の先には剣道部部長の司甲。ブランシユリーダーの司一の義理の弟だったけ。

「……………レプリカ、一応あいつらについてやってくれ」

「心得た」

指輪からレプリカの子機が出て雫たちについて行く。

「何もなければいいんだが」

悠一は店に入った。

<雫視点>

私たちは少女探偵団（エイミー命名）は今先日達也さんを襲ったと疑っている剣道部の主将司甲を尾行している。けどさつきから人気がないところへ歩き、ついにはせまい路地に入ってしまった。

「どうする」

「怪しいけど」

「行くっきゃないよね」

私たちはついて行く。

しばらくすると、司甲が走り出した。

「気づかれた!?!」

「とにかく追うよ!」

そして角を曲がるとそこには誰もいなかった。

「あれ?」

「どこに……………」

「かかったな!」

「!?!」

物陰からヘルメットを被った黒いライダースーツを着た人が4人出てきた。

「なっ、なんなんですかあなたたちは!」

4人はジリジリと私たちに迫り、私たちは身を固めていく。

「二人とも」

エイミーとほのかに小声で話しかける。

「CADのスイッチを入れて。合図したら走って逃げるよ」

「うん」

「わかった」

見つからないようにCADのスイッチを入れる。

「ふん、こぎかしいネズミめ。我々の計画を邪魔するようなら……
今!!」

4人組の間をすり抜けて全力で逃げる。

「逃がすな、追え!」

「ただの女子校生だと思って……」

エイミーがCADを起動し、

「なめないでよね!」

加重系魔法で二人敵を地面に叩きつける。

「エイミー!」

「自衛的行使ってやつだよ」

「それならわたしも……」

ほのかも閃光魔法で目眩ましをする。

距離が大分空いた。このまま……

「化物め、これでもくらえ!」

「きゃあ!」

突如頭が割れるような痛みが私たちに襲った。

「な……に……これ……頭が……」

私とエイミーは膝をつき、感受性が高いほのかは倒れてしまう。

「ふふ、これは司様からお借りしたアンティナイトによるキャスト・
ジャミングがあるかぎりお前たちは魔法が使えない」

アンティ……ナイト?なんで……そんなもの……が

「っ、この……」

「まだ出力が足りないようだな」

「、!」

さらに痛みが増してくる。私も倒れてしまった。

「手はず通り始末するか?」

「勿論だ、我々の計画を邪魔するものだからな」

一人がナイフを取り出して近づいてくる。

「この世界に魔法師などは不要!貴様らには消えてもらう!」

……私死ぬの？こんなところで？

嫌だ……まだ死にたくない！

自然と目から涙が溢れた。

男がナイフを私たちに向け、振りかざす。

「!!」

現実を見たくないと反射的に目を閉じた。

……いつまでたっても痛みは来ない。

もしかしてもうすでに死んでいるかもしれないと思ったがまだ地面の冷たさを手は感じている。まだ生きている。死んではいけない。その代わりに

「おい、俺の友達に何をしてんだ？」

以外な声が聞こえた。

「な、！貴様は……」

「おらあー！」

「ぐはっ」

目を開けるとナイフを持った男は遠くで倒れていて

「お前らはやってはいけないことをした」

私たちの前には

「1つ、俺の友達に手を出したこと」

黒髪で

「2つ、俺の友達を苦しめたこと」

先日私に変態と呼んだ

「そして特にやってはいけない3め」

けど今はかつこよく見える

「俺の友達を泣かせたことだ!!!」

悠一さんが立っていた。

何気にフラグを立てていくスタイル
リメイク
済み

<悠一視点>

レプリカから雫たちが襲われていると連絡きて走って来たらヘルメットを被った黒いライダースーツを着たやつが雫にナイフを振りかざそうとしていたので蹴飛ばした。そして怒りのあまり名言っぽく言ってしまったがよくよく考えてみると。

「恥ずかしい……………黒歴史確定だな」

かなり後悔していた。

「悠一……………さん」

「大丈夫か雫、ほのか、明智さん」

「え、どうしてあたしを」

「あー、風紀委員の資料作成の時で名前見たから」

実は随分前から知ってましたなんてストーカーみたいで言えない。

「てか何でお前らこんなところに」

「それは……………」

「くそ！これでもくらえ！」

すると蹴飛ばした男が立ち上がりキャスト・ジャミングを発動した。

「う、！」

雫たちは再び倒れてしまう。

「(アンティナイト?こいつらブランシユの一員か!)」

だが悠一は効いてる様子もなく立っていた。

「なんでキャスト・ジャミングが効かないんだ!?!」

「おい!出力を上げ「お前らさ」……………!」

「それいい加減やめてくれないか?こいつらが苦しんでるんで。すぐにやめたら痛い思いしなくてすむよ」

「何、を……！今あいつは魔法が使えないんだ！とつとと殺すぞ！」
4人がナイフをこつちに向けて走ってくる。

すると悠一はため息をついて。

「仕方がないな……痛い思いしなくてすんだのに」

悠一はポケットから弧月の柄のような物を取り出して

「夢月」

と呟く。

すると柄の先から青く透明な刃が出てきた。

「(……………何だろうあれ?)」

雫は痛みを耐えながら夢月を見る。他の二人も同じように見ていた。

「(夢月、初の実戦がこれになるとはな……)」

悠一は夢月を片手で構え、男たちを迎え撃つように走り出した。

「ははあああー！」

一人目は右腕、そして流れるように腹、二人目は太ももと左肩、三人目は右肩から左斜め下に斬り、最後は腹を横一線に斬った。

けれど男たちに傷どころか服も斬れていなかった。

しかし

男たちは声も出さず気絶し、倒れていった。

「!!!」

その光景に雫たちは絶句していた。

この世界で俺とレプリカが作った魔法のひとつ、「夢月」。

これはサイオンで作った刃に触れた箇所にもるで真剣で斬られたような痛みを相手に与えるというものである。これは専用のCADを使わなければならない。いずれは手刀の構えをするだけで使えるようにしたいな。……………睡眠時間がまた減る……………

キャスト・ジャミングの影響は本来受けるはずなのだが、キャスト・ジャミングは無意味なサイオン波を大量に散布する無系統魔法。つまり事象干渉力が強ければ普通に魔法を発動することが出来る。

ちなみにこれは千刃流剣術の裏奥義の「裏の秘剣・切陰きりかげ」と効果が

ほぼ同じなのでエリカにバレたら面倒なことになりそう。

「さて、終わったが雫たちは大丈夫か？」

夢月をしまつて雫たちを見る。

雫たちは起き上がっていて見た感じなんともなさそうだった。

「うん大丈夫」

「わたしも大丈夫です」

「あたしもだよ」

「よかった。それじゃ俺はこいつらを警察に……………」

「くそ！このことを司様に……………」

すると一人が立ち上がって逃げた。どうやら詰めが少し甘かったらしい。

「待て！逃がすか」

悠一は加速して追いかけてようとするが

「う、うわああ！」

男の足がみるみる凍っていき転んだ。

「これって……………」

後ろを向くと

「逃がしません」

深雪が立っていた。

「深雪！」

「ナイスタイミング！」

ほのかと明智さんが喜んでいる。

「深雪も尾行を？」

「いいえ、あなたたちが気になったから」

成る程、雫たちを見つけたのは深雪もだったか。

「ありがとな深雪。とりあえずこいつらは……………」

「……………出来れば私に任せてもらえないかしら……………」

「(……………ああ成る程、九重八雲に頼むのか)」

「わかった、俺はこいつらを送っていくよ」

「ええ、お願いするわ」

今は雫たちを学校前まで送っている。全員キャビネットを使って
いるので近い学校に歩くことにした。

「悠一さん」

「何だ、雫」

「さつきはありがとう」

「どういたしまして」

「本当に助かりました」

「いいってほのか。ただ、今後はあまりこういうことに首を突っ込む
なよ」

「二はい……………」

さすがにみんな反省している。まあ俺がこなかったら本当に危な
かったからな。

「ねえ、空閑くん」

「何明智さん、それと悠一でいいよ」

「じゃあたしもエイミイって呼んで。悠一くんが使っていたあれは何
？」

「エイミイ、それは……………」

「別に大丈夫だ雫。と言っても普通に教えるだけじゃつまらないから
考えてみる。それで答えが近かったらおしえてやる」

「えー！悠一くんのいじわる〜」

「いいじゃんか」

「そんなの宿題みたいでなんか嫌だ〜」

「なんか子供みたいで可愛いぞエイミイ」

「、え。可愛い？」

「？ああ、可愛いぞ」

エイミイは顔を真っ赤にして目を反らした。

「あれ、エイミイどうした？」

「な、なんでもない！」

「？」

「……………むう」

何故かいきなり雫が肘で横腹をつつく。

「ちよ、雫？痛いんだけど……………って何で拗ねた顔してんの？」

「……………別に」

色々鈍感な悠一であった。

「またわたし空気？」

ほのか、ドンマイ by 作者

<エイミイ視点>

「……………うう」

家に帰ってからずっとこの調子だ。頭の中から悠一くんの顔が離れない。

彼のことは名前くらいしか知らなくて、会ったのも今日が始めて。なのに……………

「……………かつこよかったなあ」

「(それにピンチの時に助けに来るとかまるで王子様じゃん!)」

床の上でゴロゴロと左右に寝転がって、ある一つの答えにたどり着くと止まった。

「これが恋なのかな……………グランマ……………」

明日悠一に会って目を合わせることが出来るか心配なエイミイであった。

〈零視点〉

「……………むー」

家に帰ってご飯も食べてお風呂も入った。けど胸の中のモヤモヤする気持ちがどうも治まらない。

頭の中にはエイミィと悠一さんが仲良くしている時のことばかり思い浮かぶ。

「……………ええ悠一さん、かつこよかったなあ」

ナイフを持った相手にも屈せず、果敢に立ち向かう悠一を思い出す。

「……………あれ？」

今度はドキドキしてきた……………なんでだろう。

「明日ほのかに聞いてみようかな……………」

案外自分の恋愛に関しては鈍い雫であった……………

テロ前日

リメイク済み

<悠一視点>

昨日雫たちを助けたことでブランシユが動き出したことが明らかになったので、悠一はこれから起きることについて考えていた。

「たぶんだけど今日か明日かに放送室で壬生先輩たちによる放送があるはずだけど」

原作知識といっても日程までは詳しく覚えていたのではなく春にブランシユ事件、夏休み前に九校戦と、このような感じで覚えているのである。

「まあいつでも対処出来るようにしてるけどな」

いつそのことテロが起きる前にブランシユを叩き潰そうとも考えたがやめた。あの事件は壬生先輩が変わるために必要なものであるため、事が終わる前に終わったら意味がない。

「……ん？。おい雫、ほのかく」

ちょうど校門前に雫とほのかがかギャビネットから降りた所を声をかけた。

「おはよう二人とも」

「おはよう悠一さん」

「おはようございます、悠一さん」

「悠一さん、昨日は改めてありがとう」

「いいよ、友達を助けるのは当たり前だろ」

「それでも本当に感謝しています」

「てか、こんなところで立ち話もあれだし話ながら行くか」

「うん、わかった」

しばらく歩くと赤い髪が特徴のエイミィが歩いていた。

「エイミィー、おはよう」

「、！お、おはよう……」

「おいおいどうした？カチコチなってるぞ表情」

「あ、いや、あの、その……」

「それに顔赤いぞ、トマトみたいになってる」

「あー！そろそろ時間だなー！それじゃまた後でね！」

エイミイはあつという間に校舎に走っていった。

「……………何があつたんだ？」

「……………えい」

急に雫が悠一の腕を掴まんで捻りだした。

「イタタタ！、雫痛い痛い！」

「……………ふんっ……………」

雫は離すが表情はどこか不満があるような顔をしていた。

「雫どうしたんだ？昨日もそうだったが……………」

「今日悠一さんは私たちに昼飯を奢ること」

「はい!?てか俺今日も生徒会室で食べるつもり……………」

「命令」

「?……………あ」

「仕方がない。生徒会長に報告を「勘弁してください雫様」はい、決まり」

「……………お前ノリノリだろ」

「……………さあ」

雫はニヤリと笑った。

「はあ……………。はいはい、奢らせてもらいますよ雫様」

「もちろんデザートもね」

「……………りよーかい」

教室に向かって歩きだす悠一たち。

「……………またわたし空気になって……………」

いやー、本当にすいませんねほのかさん b y 作者

「そもそも、なんでこんなにわたしの出番少ないんですか!」

いやー、だってアンケートにも書いた通り、深雪とほのかは達也のヒロインとして登場してもらおうつもりだからまだ出番はなくて

…………… b y 作者

「そうだとしても！しかも優等生の方ではわたし出番多かったですよ！作者がこんなに減らしたじゃないですか！」

九校戦の時から出番増やしますから………ってなんか聞こえるような…… by 作者

うおおおお！てめえ！ほのか様の出番増やしやがれ！さもなくて一生小説書けないようにしてやる！ by 謎の集団

え！まさかのほのかファンの押しかけ!?それじゃほのか、ちゃんと出番は増やすから待っててくれ by 作者

「え、ちよつと！作者さくん！」

………何だろうこの会話？ by 悠一

昼休み

「………何故こうなった………」

今食堂で雫、ほのか、エリカ、レオ、美月と一緒に食べている。

食堂でエリカたちとぼったり会ってしまい、雫さんに脅されエリカたちの分まで払うことになってしまった…。

不幸だああああああ！と某ツンツン頭の主人公みたいに叫びたいきぶんだった。

「悠一さんデザートもお願いね」

「あの？雫様……？いくらなんでもそれは「悠一さんはー私のー」わかった！わかりましたよ！」

「あ、悠一くんアタシもお願い」

「オレも」

追い打ちやめろこの夫婦が！

財布からクレジットカードを取り出してトボトボと歩く。

「(悠一の将来が少し心配だな………)」

遠い目をしながら（目の形は変わっていないが）レプリカは静に思った。

そして放課後

「雫たちは今日も部活か？」

「うん、悠一さんも風紀委員のお仕事？」

「ああ、あの委員長結構こき使うから俺のこと」

荷物をまとめて教室を出ようとしたその時

『全校生徒の皆さん!!』

耳が痛くなるような大音声がスピーカーから飛び出した。

「な、なに!?!」

「これって……………」

『僕たちは、学内の差別撤廃を目指す有志同盟です!』

「悠一さん」

深雪が此方に駆け寄ってくる。

「恐らくこれは……………」

「ブランシユ関係だろうな」

『僕たちは生徒会と部活連に対して、公平な立場における交渉を要求します』

「まるで子供が駄々をこねてるようですね」

中々辛辣な言葉ですね氷の深雪女王様。

「それが本心かは定かではないが……………」

ちようど委員長から放送室前に集合せよと連絡が入った。

深雪も同じように生徒会から連絡が来たようだ。

「雫、ほのか、俺たちは放送室に行く。お前たちも大丈夫だと思うが部活の時も、帰るときも気を付けてな」

「わかった」

「気を付けてください」

俺たちは駆け足気味で放送室に向かった。

あの後、放送室にいた人たちは無事に拘束し、明日放課後講堂で討論会が行われるようになった。こちらの代表は真由美さんだが、よっぽどのがない限り、論破して討論会自体はすぐに終わるだろう。俺は家に帰ると軽くトレーニング（腕立て、腹筋、背筋各100回を3セットし、トリオン兵50体と印なしで戦う）をし、すぐに飯食って風呂入って寝た。

さあ、いよいよ原作改編だ！

ブランシュ到来

リメイク済み

討論会当日の昼休み

ただいま雫、ほのか、レオ、エリカ、美月の5人と一緒に食事中。それにしてもやっぱり食堂のカレーは旨いわ。

「ねえ、今日の討論会、みんなどうする?」

ふいにエリカがそんなことを聞いてきた。

「オレは部活だから行かないぞ」

「あんたには聞いてないから」

また痴話喧嘩始まったよ。もう付き合ったら二人とも。

「私も部活です。ほのかさんはどうします」

「わたしも雫と部活かな。悠一さんは風紀委員で警護にあたってるんですよね」

「一応な。人使いが荒い委員長だからこき使われてるの」

「ほんつとに嫌な女よね。悠一くん、一回反抗した方がいいわよ」

「エリカ、それはさすがにダメだ。仮にも一高で三本の指に入る人だぞ」

まあ、負けないが。

「平気よ悠一くんでも勝てるから」

いくら大好きな兄取られたからって冷たすぎやしませんかね。

「とにかく、意味のない駄々をこねてるだけの討論会の警護頑張ってくるわ」

俺の言葉に皆以外だったように黙ってしまった。

「悠一さんも何気にひどいような」

美月、そういうのは気にしない方がいい。

さてブランシュはどう動くかな……………

放課後

討論会は差別撤廃の人たちが考えなしに一方的に言っているのを真由美さんが一個一個論破して誰も言い返せなくなつたところで真由美さんがすう、と軽く深呼吸をして

「私はこの学校の生徒会長として、現状に満足はしていません。時にこうして対立による事態を招く形になってしまったのは私の力不足と思つています。ですので私たちに許されるのは制度上の差別を無くすこと、逆差別をしないことの二つだけだと考えています」

「ちようど良い機会ですから皆さんに私の希望を聞いてもらいたいと思います。私たちに生徒会を指名する制度に二科生を差別するような規則がありますが、この規則は生徒会長改選時のみ改定することが可能です。そして私が退任時に撤回することを私の生徒会最後の仕事にするつもりです」

講堂にざわめきが響く、それはそうだ過去今まで変えようとしてなかつた事を変えようとしてるんだからな。でもそれが成功すれば差別による意識は変化していくだろう。確実に。

「これからも私にできる限り改善策に取り組んでいくつもりです」

真由美さんカッコいいじゃん。だがブランシュはそんなことは端からどうでもいいことだと思つてるだろうな。

そしてそれを決定づけるように外から爆発音が聞こえてきた。

講堂に悲鳴や驚きの声が飛び交う中、エガリテのリストバンドをしている生徒が一斉に動き出した。

「取り押さえろー！」

委員長の指示により、近くにいた風紀委員に押さえられたが俺は構わず講堂の入り口に向かって走っていた。

「おい、悠一、どこに行くんだ!」

達也の呼び声にも振り向かず走る。

するとアサルトライフルを持ったテロリスト数人が入ってきた。

「夢月」

俺は手に持っていた夢月専用CADを起動し、瞬く間にテロリストを斬っていく。

「ぐはっ!」

お決まりのやられ台詞を吐いて倒れる。しかし本当に夢月便利だな。

「悠一!」

達也が近づいてくる。

「こいつらが来ることを知っていたのか?」

「いや、この間の……深雪から聞いたろ? 雫たちのこと」

「ああ、一応な」

「それで警戒はしてたんだよ。今のは視覚魔法で入り口の向こう側を見たからなんとかなった」

勿論嘘です。レプリカを介して見てたなんて絶対に言えないからな。

「……………そうか」

そんなに疑うなよ。

「ところでそのCADについてだが……今度教えてくれ」

「そうしてくれ、今は外にいるやつ片付けるぞ」

「俺は校舎付近をやる」

「じゃ俺は部活やっているとところを見てくるわ。雫たちも心配だし」

「頼んだぞ」

「そっちも取りこぼし無いようにな!」

俺は魔法で加速し、とりあえず雫たちの所へ向かった。

途中出会った敵を斬り倒して行きながら向かっていくと

「キヤー!」

演習林から女子の叫び声が聞こえた。

「チツ！間に合え！」

演習林に着くと何人かのテロリストが銃を持って女子を脅していた。

「く、！」

建物の端に止まりこつそり覗いた。

「(テロリストと女子生徒の距離が近いな……こうなったら「ドレイ・ブリザード」で撃退するか)」

するとテロリストの一人が人質をとるようにほのかに近づいてきた。しかし

「ほのかに近づくな！」

雫が競技用のCADでテロリストを吹っ飛ばした。不味い

「キサマー！この女を撃ち殺せ！」

……は？……殺す？……誰を？……

ダメだ……

それだけは……

「……………あれ？」

気がついたら目の前にテロリストが倒れていた。そして後ろには地面に座り込んでいる雫がいる。

「……………雫どうしたんだ？てか何でテロリスト倒れてんの？」

「え、……………覚えてないの？悠一さんが倒したんだよ」

「まじで！意識ないのに倒したのか俺？……………まあいいや。」

「大丈夫か雫」

「う、うん。けど何故か立てないの」

「しょうがないな……………よっ、と」

／／／／／／／／／／

俺は雫を持ち上げて校舎の影に運んだ。

ちなみにこの時悠一がしたのは所謂お姫さま抱っこである。

「俺は他の所見てくるから。ほのか！雫を頼む」

「は、はい！わかりました」

「じゃあ……」

「あの……悠一さん！」

「なんだ？」

「その……気を付けてね」

上目遣いの気を付けてね、は効果は悠一にばつぐんだ！

「っ！お、おう。行ってくる」

悠一の胸には嬉しい、楽しいとは別のドキドキした感情が芽生え始めた。

<雫視点>

「雫、大丈夫？」

ほのかが心配して声をかけてくれた。

「うん、平気。もう少ししたら立てると思う」

「……悠一さん、すごかったね」

「すごいというより……あれは少し怖かった……」

銃を向けられた瞬間、悠一さんが見えない程の速さでテロリストたちを殴り倒していた。その時彼の顔が見えたが、あれは鬼よりも恐ろしい悪魔の顔だった。でも私が救われたのには変わりない事実。それに……

「カツコよかったな……」

そう、とてつもなく

「……なんかドキドキする」

誰にも聞こえないくらいの声でそう言った。

<悠一視点>

一通り敵を片付けて、保健室に向かった。エリカとの戦いで怪我を負った壬生先輩の話を知ったためだ。

壬生先輩が話してくれた内容は原作と同じ、委員長の発言の勘違いのせいで一年間無駄になったと泣いていたがそこは達也の見事なフォローが入り、壬生先輩は達也の胸を借りてまた泣いた。

そして達也がブランシュを叩き潰すと言い始め、十文字先輩が協力し、小野先生（遙ちゃん）からアジトを突き止め、突入メンバーを達也、深雪、レオ、エリカ、十文字先輩、後から桐原先輩になった。ん？俺？一緒には行かないよ。だって……………

トラウマ植え付けるのに達也がいたら邪魔だからな。

保健室から出て、達也たちが突入の準備をしている最中俺は誰もいない屋上に来ていた。

「レプリカ、やるぞ」

「心得た」

指輪からニュツと出てくる。

「^{デコイ}匣 印」

灰色の印から瓜二つの俺が出てきた。

^{デコイ}匣 印

頭の中で思い浮かべた物をトリオンを使って生み出す。生物を模造したものはコントロールして使うことができる。ただし、物による大ききさによってトリオンの使用量が変化するためそこは注意。レプリカが^{デコイ}匣 印に入り、レプリカ自身が操作することも可能。

レプリカには俺が学校にいないと怪しまれることを防ぐためここで動いてもらう。

偽悠一にレプリカが入っていく。目がパチリと動いた。

「よし、後は頼んだぞレプリカ」

「了解した、ユーイチ」

ちなみに今レプリカがしゃべっているのは俺の声。なんか気味わるいな……………ドツペルゲンガーみたいで。

「トリガー、オン！」

遊真の黒トリガーを身に纏い、神様から貰ったマントを着て、レプリカの子機を連れてブランシユのアジトへ向かった。

くブランシユのアジトく

さあて、……………処刑の時間だ。

扉を蹴飛ばして無理矢理入る。

「何者だ！」

おいいたいたブランシユのリーダーの……………あれ一時名前覚えていたんだけど……………いいか別に。

無言で近づいていく。

「もしや十師族の回し者か、お前たち！」

リーダーと周りにいた全員が俺に向けてキャスト・ジヤミングを発動してくる。……………こんだけのアンテナイトいくらすんだろ？

「どうだ？キサマが何者かは知らんがここに来た以上は消させてもらう！」

まったく、…………馬鹿にも程がある。

こんなやつらに使うのも勿体無いが、今までのお返しだ。

マントを着けたまま黒トリガーを解除し、風刃を取り出した。

「無駄な足掻きを…」

うるさい

風刃をブレード状態（風刃特徴の光の帯のようなものが無い状態）のまま刃を抜き。

「消えろ」

リーダー以外の全員の手首、腹、足を一瞬で斬った。

「な、な……………」

工場の錆びた鉄の匂いとは別に、血の海と化した辺り一面から鉄の匂いがした。

コン

一歩ずつ、ゆっくり近づく。

コン

「ま、待て！金か？それとも地位か？何だつてやる、だから……………」

「黙れ」

「ひっ、」

あつという間に男の目の前に立った。男はペタンと座り込んで震えている。

「あなたのやったことは決して許されるものじゃない。だがその罪を裁くのは俺ではない」

「が」

風刃のブレードを男の首もとにあてる。

「あ、ああ！」

「迷惑したのはこっちもだ。それ相応の対価を払ってもらおう」

「何を……………」

「決まってるだろ」

夢月を起動し男の右足を斬る。

夢月な魔法のためトリガーではない。というかこの間試しにトリガーとCADを同時に使うことが出来るとわかった。

……………これチート？

「ぎやあああーやめろ、やめ「やめない」

続いて、左足、右腕、左腕を斬っていく、気絶させないように加減を考えながらやったけど少しめんどくさかった。けどまだ話もある

からな、慎重にいこう。

「おい」

「、！」

もはや声すら出ない状態だが構わず話かける。

「俺がお前らにしたことは誰にも言うなよ」

ものすごい勢いで首を縦に振る。

「ならいい」

俺はアンティナイトを血の海から回収し、来た道に戻った。

だが彼は帰らない、何故ならば本当にトラウマを与えるのはここからだ。

悪魔の追い討ち

リメイク済み

<悠一視点>

「さて、ここら辺りでいいかな」

工場からおおよそ三kmも離れた山の中に立っていた。

理由は工場でブランシユのリーダーが口を割らないかどうか監視するため。最悪重傷負わせて意識不明状態にさせる。……………狙って出来るものではないのでは？と自分で自分ちツツコミをいれたが…気にしない。

工場の中の様子は、ダクトに忍ばせているレプリカの子機から映像と音声を送ってもらっているためしつかりと確認できる。

すると車が一台フェンスを突き破ってきた。

「お、達也たちが来たか。ブランシユのリーダーさん、自分で自分の首を絞めることはしないように願っておくよ」

<達也視点>

俺たちはブランシユのアジトへ侵入するため、俺、深雪、レオ、エリカ、十文字先輩、桐原先輩と共に車を走らせて向かっていた。

「……………お兄様」

「どうしたんだ、深雪」

「いえ、考えすぎかもしれませんが…………」

「言っただけじゃん」

「……………急いだ方がいいと思います」

「急ぐとは……………工場にか？」

「はい、自分でも何故かわからないのですが……………」

「深雪も？実はあたしもそう思ってたんだ」

「エリカもか。何故そう思うんだ？」

「ん、あえて言うなら……女の勘ね」

「勘かよ、もう少しましな答えはねえのかよ」

「うっさいわね！女の勘はね、よく当たるものなのよ！」

「勘か……」

達也は信憑性が無いものだと一瞬思ったが、なぜか否定することはできなかつた。

「十文字先輩」

「ああ、ともかく急いだ方が良さそうだ。桐原」

「分かりました」

車は加速し工場へと近づいていく。

数分後工場の入り口が見えたがフェンスで閉められていた。

「オレに任せて突っ込め！装甲！^{バンザー}」

車の装甲がレオの硬化魔法で傷ひとつ付くことなくフェンスをぶち破った。

「よくやった、西城」

「う、うす」

「おかげでへばっちやってるけどね」

「うるせえ……こんなの平気だ……」

「司波これからどうする」

「本来なら分かれて別々の方向から行くのがよろしいのですが……」
「カ所に固まっていますね、他の場所を見ても人がいない。ここは全員で行きましょう」

「ほう……中が見えるのか」

「七草先輩のように高性能ではありませんが、エイドスを探るのは得意です」

「万が一逃げた者がいたらどうする」

「俺が常に視ておくのでなにかあったら俺自身で対処します」

「分かった」

「レオ、行けるか？」

「大……丈夫だぜ」

「よし、それじゃ行きましょう」

工場の中を走っているが誰とも遭遇しない。それどころかさつきから人がまったく移動していない。もしや………

「止まってください」

扉の前で皆が止まる。

「この先にいます」

「司波、俺が先行しよう。銃を向けられても俺なら大丈夫だ」

十文字家の「フアランクス」のことだろう。その防御は現日本にある防御魔法の中で最強と言われるほどだ。

「分かりました。お願いします」

「では………行くぞ!」

「な、!」

「これは………」

予想では銃を構えて待ち伏せをしているかと思っていたが、予想斜め上の光景が今日に映っている。辺りは血の海と化し、肉体は切り刻まれていた。血の海の向こうにブランシュのリーダーの司一が座り込んでいた。

「なんなんだ………なんなんだお前らは! ぞろぞろと出てきて! さつき出ていったんじゃなかったのか!?!」

さつき? どういうことだ。

「ブランシュのリーダーの司一だな。拘束させてもらうぞ」

「く、くそ、これでもくらえ!」

司一がアンティナイトのキャスト・ジャミングを発動させる。

「そんなものお!」

だが桐原先輩が一人で突っ込んでいき、

「てめえのせいで壬生があ!」

「高周波ブレード」により切れ味を増した真剣で右腕を斬った。

「ぎやあああ！」

「この……………」「よせ！桐原」十文字会頭……………」

「そこまでしておけ」

「っ、はい……………」

「深雪すまないが頼む」

「お任せください」

深雪が切り口の血を凍らせて止める。さて……………」

「いくつか質問があるのだが……………」エリカ」

「何？達也くん」

「そいつらの外傷を見て何か分かったことがあるようだな」

「あはは、さすが達也くん。分かっちゃったんだ」

「で、何が分かった？」

「……………」こいつら全部真剣で斬られてる、けどこいつらアンティナイト持ってたんじゃないかな。全部中指だけ共通に斬られてるから。指輪をした後もある。だけどそれだったらおかしいところがあるのよ」

「おかしい？」

「うん、真剣で斬ったんならこんなに綺麗に骨まで斬れるはずがない。でもまるで包丁で豆腐を切ったように断面が綺麗なの。普通の得物じゃまず無理ね」

エリカ程の年頃の女子ならこの惨劇を見て悲鳴の1つや2つあげて見ていられないはずだがそこは千葉家の娘、冷静であった。

「成る程。おい……………」

達也は殺気を含んだ低い声で語りかけた。

「な、なんだ!？」

「明らかに俺たちの前に誰かいたようだな。そいつについて話してもらう」

「だ、だめだ。そいつには決して喋るなど言われている……………」

「ではここで地獄を見るのとそいつの約束を守る、どちらを取る？」

シルバーホーンを司に突きつけ脅す達也。

「わかった！だから命だけは……」

「まずそいつの外見は？」

「そいつは……黒い……」

刹那、司一の真下に光る線のようなものが現れた。達也は反射的に後ろに飛んだ。

次の瞬間

光る線から現れた斬撃が司一を襲った。

「があ、！……………」

四肢全てが斬られ血が大量に溢れた。

「まずい、深雪！」

深雪は司の体全体を凍らせて血を止めたが、これだけの大量出血、当分は意識が戻らないだろうと確信した。

「十文字先輩、救急車の手配をお願いします」

「わかった。家にも連絡してここを調べてもらおう」

「お兄様……………」

「達也くん……………」

「達也……………」

皆納得のいかない顔をしている。

「そいつはなんていったの？」

「いや……………黒い、としか言ってなかった」

「黒い服装ってことか？んなもん、手がかりにもなりやしねえな」

「そうだな、とにかく思う所があるだろうがここは十文字先輩に任せよう」

「そうだな……………」

「そうね……………」

車に戻る途中達也はずっと考えていた。司一が斬撃をくらった後、声に出さずに言っていた言葉があった。読唇術ですぐにわかったがその言葉は悠一に対してさらに疑いを高めるものだった。

「(この悪魔め……………か。まさかな…………)」

<悠一視点>

「ふう、危ない危ない」

見事風刃を使って情報が漏れるのを防いだ(実際達也にはバレているが) 悠一は一人安心していった。

「何も言わなかったらよかったのに……………まあ、達也の殺気をぶつけられたら無理もないか」

よいしょ、と腰を上げる。

「さてさて急いで学校に戻りますか」

この後は無事にレプリカと合流できた。

く翌日く

テロにより今日から3日間臨時休校になり、家でくつろいでいる。

「あー、なんかこういう日もたまにはいいな」

「ユイイチは少し気張りすぎだ、しばらく休むといい」

「……………だけどそういうわけにはいかないんだよな、これが」

そう、ブランシュのリーダー司一を襲ったのは「黒い悪魔」ではな

いかと噂が流れている。もちろんただの噂だと気にしない者が多いがここで厄介な連中が動き出した。

十師族だ。

あの四葉まで俺を探しているというのだから正直迷惑している。今のところ俺だと疑われてはいないがそれも時間のもんだいだろう。

というわけで、

「よしレプリカ、行くぞー！」

「せめて今日1日くらいは休みに専念しておいた方がいいんじゃないか？」

「いや、早めの方がいい。しかも俺らの方を気にしていられなくなるからな。メリットもちゃんとする」

「決めるのはユーイチだ。心得た」

「じゃあ最初は……………」

一条家、行ってみようか」

<零視点> 遡って、ブランチ事件当日の夜

「いやー、心配だったんだぞ。会社の方に娘の高校がテロに襲われたって聞いたときは生きたこころちはしなかつたからな！」

「もう、潮くんそれももう3回目よ」

今はお父さん、お母さん、航とほのかと一緒にご飯を食べているけど……………お父さんが勢いでどんどんワインを飲んでいくので酔っぱらってしまった。

「……………もう」

「あはは……………」

ほのかもどうしたらいいか分からず苦笑いをしている。

「でも本当に心配だったのよ雫。怪我がなくてよかった」
お母さんが優しい顔で言ってくれた。

「うん、大丈夫。……悠一さんが守ってくれたから」

「悠一さん？お友達なの？」

「うん、同じクラスで風紀委員なんだ」

「そうだね、悠一さんがあつという間にテロリストを倒していったも
んね」

彼に助けてもらったのは今回で二度目。前路地裏で助けてもらった
時もそうだけど本当に強くて……かつこよかった。

「じゃあそのひとは雫とって白馬の王子様みたいな人なのね」

お母さんはお酒が入っているせいからかい気味でそう言った。

けど何故か、その言葉を否定出来ず……

「……うん／＼／」

と言ってしまった。

「……」

皆はとが豆鉄砲を食らったような顔をしている。

「え、皆？」

「つ、つまり」

航が目キラキラさせながら

「姉さんはその人に好意を抱いているの!？」

「……………え？えええええ！」

普段からは予想もつかない雫こ大音量が部屋に響いた。

「航！なんでそんなことを」

「だって大抵白馬の王子様に助けられた人って王子様のことを好きに
なるのが常識じゃないの？」

「それどんな常識……………？」

「あの雫がねえ……………」

「待ってお母さん、そういうわけじゃ……………」

「し、雫！」

ほのかが何故かエキサイトしていた。

「ほのか？」

「わたし、応援してるから！」

「ほのかは私のことよりもまず自分のことを優先。少しは達也さんにアタックしたら？」

「うう、それを言われると……………」

「雫」

お母さんがニヤニヤしながら

「紹介する日を待ってるわよ」

「だから待ってってば！」

この思いが恋だと気づくのはもう少し先の話。

ちなみにお父さんは白く灰みたい

「燃え尽きた……………真っ白にな」

と言っていたが特に気にしなかった。

二十八家総会議

リメイク済み

十師族

それは日本の最強魔法師集団。

一条、一之倉、一色、二木、二階堂、二瓶、三矢、三日月、四葉、
五輪、五頭、五味、六塚、六角、六郷、六本木、七草、七宝、七夕、七瀬、
八代、八朔、八幡、九島、九鬼、九頭見、十文字、十山の二十八家系
から四年に一度「十師族選定会議」で選ばれた十の家系が「十師族」を
名乗ることができる。

基本二十八家が揃って会議することはまずありえない。だが魔法
協会関東支部で一家を除き二十八家それぞれの当主がそこにいた。

その理由は、日本の魔法師のトップクラスにある二十八家の地位を
揺るがしかれない重大な事件が起こったからである。

<三人称視点>

会場のは険悪なムード一色で、どの当主も苛立ちの表情を見せてい
た。

「では今回我々が集まった理由について改めてお話ししよう」

そんな中、短く切り上げた髪に、日焼けサロンに通っているかのよ
うな肌が特徴の一条家当主、一条剛毅が喋りだした。

「我々が集まった理由はただ一つ、何者かに各家の重要機密が同一人
物によって盗まれたことが起こったからだ」

正確には盗まれたというよりも、コピーされ、持ち出された形跡が
ある、と言った方が正しいのだが、剛毅の言葉に異論を唱える者はだ

れもない。

そもそも各家の重要機密はその家の人物であつてもその保管してある場所について知るものは極わずかだ。それが盗まれたとなればその家の情報が他家、又は外国にも漏れる可能性があるため早めの対策を取る必要がある。

「同一人物というのは確定しているのですか？」

質問したのは二木舞衣、十師族二木家の当主だ。表の職業は化学工業、食品工業会社の大株主をしている。

「事前に各家の監視カメラなどの情報を照らし合わせた結果、同一人物であると判明した」

情報と言つても、見つけられたのは姿だけでそれ以外の情報は全くない。見つけようにも尻尾を掴むことすら出来ないのだ。

「今回の被害には四葉家もあてはまるのですか」

そう言ったのは、十師族十文字家当主、十文字和樹。表の職業は土木建設会社のオーナーだ。

「……四葉からはいまだに連絡がきていない」

そう、今ここにいないのは四葉家だけ。基本的に外部との接触をしていない四葉家がこうして来ないのは師族会議以外では珍しくなかったが……その時

「あらあら、どうやら来ていなかったのは私たちだけのだったようですわね」

その声到会場がざわめく。入り口に立っている声の主は四葉家当主でありながら、『夜の女王』『極東の魔王』と呼ばれる魔法師、四葉真夜だったのだ。

「四葉家に参加されるとは珍しいな」

ざわつく中、落ち着いたトーンで話しかけたのは、十師七草家当主、七草弘一。七草真由美の実の父であり真夜と同レベルの魔法師だ。……ちなみに真由美からは陰で『狸親父』と言われるほど嫌われている。

「今回の事は我々も被害者ですからね」

その一言で会場のざわつきはさらに大きくなる。被害者、というこ

とは四葉も重要機密を盗まれたということだ。同時に、本宅が一切わからないあの四葉の居場所を特定できる相手ということもわかった。「それで？四葉家のことだから当然追っ手はだしているのだろう」「貴女方に話をする義務はありませんが………まあ結果は残念、とだけ言っておきましょう」

四葉家と七草家は十師族の中でも魔法師の力と共に情報力も高い。しかし四葉家は黒羽の者を使っても無駄だったのだ。

その言葉を予測していたかのように弘一は「そうか」と言った。

「ですが………」

真夜は和樹を見ながら

「今回の人物に十文字家は心当たりがあるようですが」

和樹は顔を渋める。

「ほう、それはどういうことだ？十文字家当主」

剛毅が目を鋭くして話しかける。他の当主も同じように和樹を見た。

「………先日、第一高校がブランシユによるテロを受けたのは皆さんも知っておられるでしょう」

「そのブランシユのリーダー、司一が何者かによって重傷を負い、現在も意識不明の重体だそうです。我が息子、十文字克人と数人の一校生が現場に向かいましたが、到着したときには彼の部下が全身を切り捨てられ全滅、司一にその理由を問いただそうとしたところ奇妙な斬撃が飛んできて司一の四肢を斬ったそうです」

「その奇妙な斬撃というのは具体的にどのようなものでしたか？」

十師族六塚家当主、六塚温子が手を挙げながら質問する。六塚の表の職業は地熱発電所堀削のオーナーだ。

「克人に聞いた限りだと急に光る線が司一の体の下に現れて、そこから斬撃が飛んできたと報告しています」

「そんな魔法が存在するのか？」「そもそも系統がわからないぞ」そんな声ばかりが会場を飛び交った。

「で、そんな話をした理由はあるのだろうか」

会場のざわつきを一刀両断するかのように低い声で言ったのは、十

師族九島家当主、九島真言。世界最強と言われていた九島烈の息子である。

和樹は心のなかでため息をつき

「……………我々十文字家は今回の事件の犯人と、司一を襲った者を同一人物と捉えています。そしてその人物は「黒い悪魔」ではないかと推測しております」

当主のほとんどが絶句する。

「黒い悪魔」

3年前の沖縄大亜連合襲撃の時に突如現れた謎の人物。

見たこともない力を使って敵をなぎ倒していき、「化成体」とは違うロボットののような機械を黒い穴から生み出し、従え、大亜連合を恐怖の底に叩きつけた。黒いフード付きのマントを着て敵を倒す姿から大亜連合から「黒い悪魔」と呼ばれるようになった。

そして、襲撃が終わると霧のように消え、そのまま行方が分からなくなっている。

その「黒い悪魔」が再び現れたということに一部の者は除き誰もが驚きをかくせないでいた。

「では私の方からも一つ」

先程と変わらない声で真夜が言い、懐から封筒を一つ取り出した。「今日の朝、私の所にこれが届きました。差出人は書いておりませんが、封筒にこのようなことが書かれていました」

” 四葉真夜殿へ、近々師族会議が行われることでしょう。この封筒はその会議で開けていただきたい。そして、中に入っている手紙をあなた自身が読んでいただきたい。勿論、あなたがこれを守らずにどうしようが結構だが、この手紙の内容は貴女方日本を代表格する魔法師

にとって関する重要なことを書いてあるので、これを読まないのは貴女方のデメリットになることでしょう”

「……………中には本当に手紙が入っているのか」

剛毅は表情を変えずに言う。

「調べたところ普通の紙が入っていたので手紙です。…さて、書かれてある通り私が読んでもよろしいのでしょうか?」

誰も自分が読む、なんて言うはずがない。得体の知れない相手から送られてきた手紙を自分自身がわざわざ見るような真似はしたくないのだ。

「いないようでしたら、読ませていただきます」

真夜はゆつくりと封筒の中から手紙を取り出し、広げ、読み始めた。

” 十師族、ならびに師補十八家の当主様。 名を名乗ることができませんが、貴方方が呼んでいる名をお借りするなら「黒い悪魔」と申します。先日、貴女方のデータを盗んだのは私です。では何故そのようなことをしたか、そう思っているでしょう。それはここ最近、私の事を嗅ぎ回っている貴方方への脅迫するためです。もし今後私のことを調べようとする者がいたら、こちらが持っている貴方方の情報を敵国に提供します。1つ勘違いをしているようですが私はこの国が嫌いというわけではございません。ただ、私の日常を邪魔する存在になる貴方方が嫌いだからです。勿論、何もしなければ、こちらは何もありません。この国が危機的状況に陥ったときは手を貸しましょう。最後に、貴方方が賢い行動をすることを私は願っていますよ”

b y 黒い悪魔

真夜は手紙を閉じ、笑顔で各当主を見ながら

「どうやら私たちは、開けてはいけないパンドラの箱を開けようとするところだったようですね」

会場は静寂の空気に包まれる。

そんな中真夜は

「(達也さんだったら、もしかしたら黒い悪魔の正体に気づいているのかもね)」

「(それにしても黒い悪魔……………ふふ、一度会ってみたいわ)」

人はやるな、と言われたらやる動物であることを改めて思った真夜であった。

「ぶっえつくしよん！、誰か噂でもしてんのか？」

家の2階にある作業室で作業していた悠一は、突然の悪寒について思った。

「心当たりならいくらでもあるがな」

悠一の顔の横をフワフワと浮いているレプリカが言う。

「二十八家のことか？・しょうがないだろ、あいつらしつこいし、それにこっちに情報という名の切り札ジョーカーが出来たんだからいいだろうが」

悠一は作業をやめ、くんと腕を伸ばした後アイスコーヒーを飲んだ。ちなみにコーヒーとミルクの対比は8:2である。……………需要のない情報だけど一応ね。

ピリリリッ　ピリリリッ

すると電話がかかってきた。

「ん、誰だろう…って達也？」

なんと相手は達也だった。悠一はc a r i eのボタンを押した。一応ビデオ通話ではなく音声だけにしている。

『悠一、今少しいいか？』

「なんだ達也？」

『実はこの前のCADについて色々聞きたいんだが』

「あー、あれか」

悠一はブランシユテロ事件の際、達也に夢月についてまた今度話す的なことを言っていたのだ。

「別にいいけど、どこで話す?」

『よかつたらうちに来ないか? 俺の家にはCADの機材もある』

「ふーん（何を考えている?）」

達也の家の地下室にはおいそれと見せないデータがある。例えば友人として招くとしても疑っている俺を家に誘うのは不自然だと思ってしまう。まあ、バレてないだろう。……………たぶん。

「いいのか?」

『ああ、構わない』

「ならお言葉に甘えさせてもらう」

『わかった。5時に駅で待っていてくれ。迎えにいこう』

「サンキュー、じゃ駅でな」

電話を切り、支度を済ませて家を出る。

「……………さて、行きますか」

悠一は真つ直ぐ駅に向かって歩き始めた。

「……………深雪」

「はい、お兄様」

「悠一が今からここに来る。5時に駅で待ち合わせだ、迎えにいくぞ」

「わかりました」

「それと……………家に帰ってからはCADを持っておくように」

「…出来ればそのようなことにならないことを願っています……………」

「出来れば、な……………」

「（悠一、お前の正体を暴かせてもらう……………！）」
達也と深雪は悠一を迎えるために駅に向かった。

司波達也と黒い悪魔

リメイク済み

<悠一視点>

駅で達也と深雪に合流して、キャビネットに乗って司波家へ着いた。……………てかアニメで見ても思ったけどでかいなく家。まあ、俺が言えたことではないが。

玄関を通りリビングへと進む。

「とりあえず座ろう。深雪、お茶を頼む」

「わかりました」

深雪がキッチンへと行き、俺と達也はソファーに腰かける。

「急ですまなかつたな」

「いいよ。特に用事もなかったからな」

「そうか……………ところで悠一」

達也が真剣な表情になる。

「何だ？」

対する俺は緊張感のない顔で答える。

「この間のブランシユの際に使っていたCADなんだが、あれは自分で作ったのか？」

ああ、それか

「まあな、正しくは俺ともう一人で作った、が合ってる」

「もう一人？」

「機械に強いやつがいるんだよ」

「ほう……………今度会わせてもらえないか」

やっぱり興味持つよな

「うーん、今忙しそうみたいだから当分は無理だと思うぞ」

実は近くにいるんだけどね。俺の指輪にいる、なんて言えない。

「そうか……………」

すると、お茶を持ってきた深雪が来た。

「お待たせしました」

「ありがとう深雪」

「ありがとな」

出された緑茶をゆつくりと飲む。あー、うまい。さて……

「達也」

「なんだ」

「回りくどいのは無しにしようぜ」

「、!!」

向こうからよりも、こちらから仕掛けた方が主導権を握りやすいと判断した。

「……………」

湯飲みを置いてこちらをジッと見つめる。

「単刀直入に聞く……」

「お前は「黒い悪魔」か」

「……まじて直球だな……」

「「黒い悪魔」？なんだそれ」

馬鹿正直には答えない。当然だ、まだ達也の見解を聞いてないからな。

「……………昨日、お前の家に行ったんだが」

「そうか、すまんな昨日は用事があって出掛けてたんだ」

勿論知っている。

昨日達也と九重八雲が来たことはレプリカから聞いている。特に家の中に入ろうとしたわけでもなく数分見ただけで帰ったから気にしてはいなかったが。

「んで？なんでその「黒い悪魔」？とやらの話にお前が昨日俺の家に行ったことが出てくるんだ」

「俺はその「黒い悪魔」に会っている」

おいおいそんな話していいのか……

「俺には特殊な眼があつてな、アイデアに直接アクセスが出来る」

「すごいな。けどそんなこと話しても大丈夫なのか？」

達也が精霊の眼のことまで話すことに驚きを隠せないでいた。

「ここから話すには不可欠だからな。それで俺はその眼でそいつを見た。だが妙なマントのせいでアイデアにアクセス出来ず、正体がわからなかった」

達也の精霊の眼でも俺の正体がばれなかったのは神様からもらったマントのおかげだ。

マントに付属している効果は、このマントを着ている物を魔法、魔眼の対象に出来ない、レーダーに移らないだ。沖繩大戦時はあまり時間を掛けられなかったので、短時間でのレプリカの解析ではその効果を実現することは出来なかったが、それを元に「隠」をつくることが出来た。ちなみに「隠」は現在改良中でそのうちマントと、同じ効果を持つことが出来るだろう。……………睡眠時間が犠牲になるが。

「へえー、そんなマント聞いたこともないけどな。どっかの国の独自技術か？」

「それはお前が知っているんじゃないか」

……………やばいな

達也は確信を持って話している。そういうタイプのやつだ。

その達也がここまで自分の力の事を話して遠回りに言っているのだ。

お前が「黒い悪魔」だ、と。

「……………」

「その「黒い悪魔」のアイデアは視れなかったが……………」

「そいつが使っていた小型の兵器は視ることが出来てな」

「!! (しまった!レプリカの子機には達也の眼で視ることが出来る!ということは…………)」

「その兵器はトリオンという見たことも聞いたこともないもので作られていてな」

冷や汗が止まらない。

「トリオン、というのをずっと調べてきたが………成果は無し………だった」

「だった、という言葉が頭に響いた。」

「お前の家に行った時、ドアや窓などの一部がそのトリオンで作られていたのを確認できた」

達也は少し間を置いて

「そしてお前がはめている指輪もトリオンで出来ていることが先程わかった」

「……………詰みだな」

だが俺は答ええない。話をそらそうと考えていたら監視カメラが眼に写った。

入ってきたときから気付いていたが、リビングには監視カメラが三台ある。隠すわけでもなく普通に見える位置にある。

見える位置にあるということは自宅警備用だろう。

たがもしや……………

「なあ、達也」

「なんだ？」

俺は監視カメラの一台を指差して。

「あのカメラ、外に繋がってるよな」

達也は目をさらに鋭くし

「……………知っていたのか」

と言った。

「いや、まったく。でももしかしたら、って思っただけ」

問題は外に流している相手だが……………四葉か……………いや

「外の相手は独立魔装大隊…だな？」

「……………まさかそこまで見抜かれるとはな」

ビンゴか。とは言え……………ここまで用意周到とはな。

『ユーイチ、そろそろ認めてもいいのではないか』

『ああそうだなレプリカ』

「達也」

「なんだ」

「合格だ」

「……………え？」

少しの静寂の中、達也と深雪の声が重なった。

「ということは悠一くん、貴方は……………」

深雪の言葉に軽く頷く。

「達也は久しぶり、深雪ははじめましてだな。改めて黒い悪魔だ。よろしく」

「……………なぜ正体を明かした」

「お前たちが俺の基準を越えていたから」

「……………要するに俺たちを試していたのか？」

「そういうこと」

達也たちに正体を明かすことになったのは駅に向かう途中でのことだ……………

　　駅に向かっていく時

「ユーイチ、私は達也たちを味方にしてもいいと思う」

突然レプリカが言い出した。

「達也たちを？確かに国防軍と四葉、そして達也と深雪の実力から見

てもメリットはでかいけど……………」

「ユーイチ」

レプリカが優しい声で言った。……………ような気がした。

「私たちの力は魔法師にとって厄介な物だ。それに先日の事で日本の魔法師に喧嘩を売ってしまった状態になっている」

「……………」

「だからこそ、仲間が必要なんだ。十師族の血を引いている達也たちと関わると彼等に被害が及ぶと考えていることも分かるがな」

「ツ……………」

そう、それがずっと思っていた。「黒い悪魔」は世界中のどの国家勢力にも属さない力という認識になっている。四葉真夜に送った手紙に日本を守る的なのは書いたが、それを向こうが100%信じているわけではないだろう。

達也にトリオンのことを話したことがバレたら間違いなく達也たちを狙う輩が現れてくる。

話さないで脅すのも一つの手法がそれはしたくない。

我儘でも……………俺は達也たちと友達でいたいから。

「ならばこうしよう。達也たちが私たちのことを「黒い悪魔」だと証明し、なをかつ私たちを追い詰めることが出来たら話したらいいのではないか。基準は悠一が決めたらいい」

「……………そうだな、そうすることにするよ」

く回想終了く

「俺が話す内容を狙いにお前たちを襲う者が必ず現れる。今ならまだ名前だけで済むが……………」

達也は深雪を見る。深雪は真剣な顔で頷く。それに答えるように達也も頷き、こつちを見た。

「お前をここに招いた時から覚悟はできている。大丈夫だ」

それに、と達也は続けて

「その言葉で俺たちを心配していることからお前は俺たちの敵ではないことがわかった」

「あらら………」

「独立魔装大隊のことも知っているとということとは俺たちのことも知っているんだろう?」

「ああ、四葉についても知ってる」

「とりあえず母上と叔母上にはまだ話さないから安心しろ」

「おう、出来れば軍の方とはまた今度話したいからカメラ切ってくれとありがたいんだけど」

「少し、待ってくれ」

達也は携帯を取り出して誰かと電話を始めた。多分風間少佐だろう。

「はい、ありがとうございます。………話し合いの日程はそちらで決めてくれて構わないそうだ」

「わかった。また後日連絡するよ」

「後日連絡するようです。はい、失礼しました」

ピツと達也が携帯を切る。

「そうそう達也」

「なんだ?」

「桜井穂波さん、元気になっているか」

「元気だ。今も母上に仕えているよ」

「良かった………え?母上?」

「?そうだぞ。母上もたまに体調を崩すようだがよく叔母上とお茶会をしているそうだ」

あれええ!?四葉深夜つて確かもう………まさか穂波さん助けたからかな。まあいいか。

「さて悠」

「ああ、全て包み隠さず話そう」

場の空気がガラツと変わる。

「それじゃあまずトリオンとは「ぐうーくく」……………」

「……………」

……………はい俺です。シリアスな空気が続いていたせいか腹がへつたらしい。

あと深雪さん？そんなに笑い堪えるのやめてくれませんか。口に手を押さえて顔を背けるほど面白かったか？

「……………悠一、早めの夕食はどうだ？」

「……………いただきます……………」

その後は深雪の手料理をぐご馳走になった。旨い、さすがだな。

その後トリオンや先日的事件性について説明した。トリオンについては俺の家にある仮想空間で実際に見せた方がいいということの後日俺の家に来ることになった。夢月もその時に話すことにした。

軽く説明しただけなのに達也が「世界のパワーバランスを崩すものだな」と苦笑していた。まあ……………否定しないが。

その後は駅まで見送ってもらい、そのまま電車に乗ろうと駅に入ろうとしたが……………

「おー、綺麗だな」

その日の夜には幸運にも満月で夜空に雲ひとつなかった。なんだがずっと眺めたくなくて、駅から歩いて家まで歩いて帰ることにした。

だが空閑悠一は知らない。もはや原作通りにはいかないことを

そして……………

「この残り僅な時間、未知の強者に出会い戦うことに使いたいもの
すな」

……………本来開くはずのない異世界の扉が開こうとしていた。

九校戦 試験勉強

定期試験

それは学生の身なら必ず挑む試練である。それは魔法を学ぶ魔法科高校でも変わらない。

魔法科高校の定期試験は魔法理論の記述のテストと実技のテストにより行われる。

一般教科については普段の提出課題によって評価される。魔法師を育てる為の教育機関なので、魔法以外で生徒を競わされるのは余計なこと、と考えられているからである。

さて、この作品の主人公である悠一は特典の中に「強化睡眠記憶」があるので心配するどころが最早しようがないのだ。なので悠一にとっては定期試験は苦ではない。

読者の方の中にはそれって何？と思うかもしれないから「強化睡眠記憶」の説明をしておこう。

強化睡眠記憶

通常、人は学んだ事を寝ることで少しずつ覚えていき、繰り返して出来るようになる。だが、「強化睡眠記憶」は一眠りするだけでそれをほぼ100%自分の経験に反映出来る。ようするに英単語1000個勉強して15分程寝たら99、98程覚えることが出来る。まあ要するにチートである。

さて、そんなチート持ちの悠一は今何をしているのかというと

「悠一さん、ここ教えてほしい」

「ちよつと雫！悠一さんに教えてもらうのにそんなに近づく必要ないでしょー！」

「エイミイだって近い、というかさりげなく腕にくっついてるよ」

「こうした方が見やすいからいいの！」

「あのーお前ら、どっちも押してくるから少し狭」悠一さんは黙ってー」「はい……………」

「……………こういうのを修羅場って言うのかな…？」

「いやほのか、見てないでちよつと助けてくれませんかね…」

「え、ええつと……………悠一さん、ファイト！」

ファイトじゃねええーと軽く心の中で叫ぶ。

そんな端から見たら羨ましい光景の渦中にいる悠一は何故このようなことになったのか思い出す。

〜昨日〜

「勉強会？」

『うん』

土曜日の昼、雫から電話がかかってきた。

『私とほのかとエイミーが来るんだけど、悠一さんも一緒にどうかなって』

「んー、俺いるか？その面子で」

『いつも小テスト満点の人がよく言うよ』

1週間に一回程行われる魔法理論の記述小テストで俺は、「強化睡眠記憶」とレプリカ先生の自宅授業の成果もあつて毎回満点を取っていた。……………前世じゃまず出来ないことだが

「そういうお前らだつてほぼ満点だろうが」

雫とほのかもA組なだけあつて優秀だ。クラス内での魔法理論の成績で俺、深雪、雫、ほのか、森……………崎だったっけあいつ？どっちでもいいや。クラスベスト5に入っている二人にわざわざ俺がいく必要があるのか疑問に思ってしまう。

『……………今回深雪には一つでも勝ちたいって思ってるから……………でも私たちだけじゃ厳しいから……………ダメ？』

「!! (可愛すぎだろおおお!)」

雫の上目使いのお願い！悠一に効果はバツグンだ！

「ん、まあ皆でやったらはかどるのは確かだな。じゃあ行かせてもら

おう」

『そう！ありがとう！』

「お、おう（何でこんなに喜んでんだ？）」

雫が目をキラキラさせながら言ってくるので、少し驚いた。

『確か悠一さんって学校近かったよね』

「まあな」

『なら明日学校まで来て、そこに迎え出すから』

「いや、いいよ。なんか悪いし」

『私の家遠いから車で来た方がいいよ』

「大丈夫だって、場所さえ教えてくれれば行けるし」

『……………学校に来て待ってて』

「いやだから『待ってて』…あのだから『命令』待つときます！」

『うん、よろしい。なら明日朝9時で待っててね』

ピツ、と電話が切れた。

「……………俺女に弱いなあ……………」

「今に始まったことではないだろう」

「うるさい炊飯ジャートリオン兵」

「……………さて、悠一勉強するぞ。明日雫たちにしつかり教えられる

ように全範囲やるぞ」

「いや待って、さすがに全範囲は……………」

「やらなければ……………」

「はい？……………」

レプリカが急に口からプロジェクターみたいに壁に映し出した。

「何を『悪いが、ここから先は通行止めだ！ キラツ』ぎやあああ！待

って待って待って！何でそれ撮ってるんだ!？」

そこに映し出されていたのは、トリオン訓練室でトリオン兵と戦っていた時に、あ、そういえばトリオン使ってアニメの格好いいシーンの再現出来ないかなあ、と思いはじめたら止まらなくなった厨二劇場であった。

とある、○A○、ナ○ト、ワ○ピース、ブ○ーチと、キャラ自体動かすことまで再現でき、要するに各主人公の変わりに名台詞を言っ

楽しんでいた時の映像だ。どうやったって？神様に頼んでアニメのDVD全巻取り寄せてもらって、DVDをスキャンして、その中のキャラ、場所、行動、音声までデータベースに入れることによって再現できたのだ！……………って言ってる場合か！

「ワタシがこの家のトリオンの管理を任されていることをユウイチは知っているはずだが」

そ、う、で、し、たああああ！この家のトリオンについてはレプリカに一任してるんだったああ！

「というわけで早速勉強だ、もしも勉強に集中していなかったら……………」

「いなかったら……………？」

「タツヤとミユキにこれを見せる」

やめろおお！よりもよもってあの二人はダメだ！だって笑い飛ばすとかしないし、絶対に冷たい目で見られるか苦笑されるかのどっちかだよ！

最早悠一の精神は後もう少しで狂うほど追い込まれていた。

こうして悠一の自分の黒歴史公開を守るための戦いが始まった……………

その後何とか公開を免れたが、悠一の状態はすでに虫の息と化していた。

そして約束の時間

学校の校門前で待っていると一台のリムジンが目の前に現れた。そして執事っぽい人がドアを開けると

「お待ちせ、悠一さん」

「お、おはよう！悠一くん」

「おはようございます、悠一さん」

雫、エイミィ、ほのかが私服姿で座っていた。

……………あの輪に座れと？世の中の男供から睨まれること確実な

んだが

そんなことを考えながら乗らせてもらい、雫の家へと向かった。
……………移動中、雫とエイミーが何度もこつちを見て顔を赤くしていたのはなんでだろう…？

そんで到着、だが……………

「でかすぎだろ」

「す、すつごーい。グランマのお屋敷ぐらいあるかも…」

雫の家はなんというか…あれだ、the お金持ち！、そんな言葉が似合う家だった。

外見はシンプルな構造でありながらでかい、しかもその周りの庭は軽くグラウンドぐらいあるぞ、これ。

「あ、ちなみにここ家じゃないから」

……………はい？家…じゃ……ない？

「ここはお父さんがよくパーティーとかするのに使うの、空港にも近いから遠くとか海外からのお客さんが多く来るんだ」

「ぞ、そうか」

そうしか言えない……てかそれ以上言えないから！

「ん、？雫、じゃ何でここにしたの」

エイミーの言う通り勉強会くらいなら家の方がいいと思っていた。ここまで来るのに1時間ちよつとかかったし。

「……………今日はここ使いなさいって、言われたから」

「言われた？誰に」

「……………お父さん」

はい？なんで雫のお父さんが？

「今日悠一さんも来るって言ったら『娘をたぶらかした男が来るだど！！……………雫！明日その男に会うからこの場所に居ときなさい！』って……………」

「……………」

「あはは、雫のお父さんって結構雫を溺愛してるから……………」

ほかか、それは遠回しに親バカと言っているもんだぞ。

入るとまだ雫のお父さんは来ていないらしく、その間に勉強会をする事になった。

勉強の方法は満場一致（俺以外）で俺が皆に教えるということになった。

大きすぎる部屋もあれなので雫の部屋（各別荘や会場に必ず雫専用の部屋があるらしい）することにした。大体広さは普通の部屋の少し大きいぐらい、だが冷房に小さな冷蔵庫、大きなテレビにジューズサーバー……………親バカの親バカすぎるだろ、これ。

そして勉強会が始まった……………のだが、そこからだ。

最初は四方形で座っていたのだが、徐々に雫とエイミーが近くで教えてほしいと詰め寄ってきたので現在に至る。

～回想終了～

「……………」

んで只今雫とエイミーがにらめっこしているという状況に陥った。

「はあ、とりあえず二人とも一旦落ち着け。これじゃ教えることも出来ないぞ」

「あ、」

「ごめん」

まったく……………何で睨んでたんだろうな。

「雫もエイミーも今回は頑張るんだろ。九校戦だつてあるんだから」

九校戦

正式名称は、全国魔法科高校親善魔法競技大会。

毎年夏に行われ、年に一度魔法科高校生たちが自らのプライドを賭けて、栄光と挫折の物語を繰り広げるのだ。

九校戦には大勢の観客は勿論のこと、一般企業や海外からの研究者とスカウトも注目する一大イベント。魔法科高校生は自分をアピールする晴れ舞台でもある。

「うん、だから絶対に九校戦のメンバーに選ばれるように頑張る……！」

おお、雫の背中から炎が見える……………

「ほのか、なんか雫暑くなってるない？」

「はは…、雫は毎年九校戦見に行ってるからね。九校戦のことになると必ず目の色が変わるからね」

「ちなみにこれがここ10年のデータ」

雫が画面を出して見せる。

「うわぁ……………」

「すごいな、これ」

選手の得意な魔法や出場競技の結果、考察まで書いてあるし……………

「実は今年の一年は、七草先輩たちの世代に匹敵するほどの実力を持ってるって客観的に思ってる」

「ウチのクラスもレベル高いし、多分かなりのハイレベルだと思うよ」

「新人戦と総合のW優勝出来るかもね！」

まあ実際、達也（技術チート）、深雪（実技チート）の二人がいる時点で可笑しいがな。

「でも……今年の三校には「クリムゾンプリンス」の一条将輝の他に有力な選手がいるから、油断はできない」

「十師族の一条の御曹司、かぁ……………」

んまあ、あいつらもあいつらでチートに近い感じだが……

「大丈夫！ワタシたちには悠一さんがいるんだから！」

「そうだね！」

「確かに悠一さんいるなら男子の方は安心かな」

「おいおい、そんなに誉めても何も出ないぞ……ま、サクツと優勝勝ち取ってくるから」

「悠一さん、凄い自信ですね」

「それくらいやってもらわないと困る」

そういう雫だが顔は笑っていた。

「まあな。あ、ジュースなくなったから取ってくる」
「私も」

二人で立ち上がり、ジュースサーバーまで歩くと。

「、キャツ！」

「！、危ない」

雫がつまづいて転ぶのを俺は支えようとするが倒れてしまった。

「雫、悠一さん！大丈夫……」

エイミイの言葉が途中で止まる。

雫は仰向けに倒れ、俺はそれに覆い被さるような状態だった。

端から見たら、悠一が雫を押し倒しているにしか見えない。

「あ……／＼／＼／悠一さん……あの」

二人の体は顔以外全て密着している。雫は顔を真っ赤に染め、心臓はドクドクと激しく鼓動して目を大きく開いていた。

「わ、悪い！……」

悠一が体を起こそうとした瞬間……

ガチャ

「雫、遅くなってすまないな、今かえった……ところ……」

雫の父、北山潮が入ってきた。

さて皆さんにクイズ！

今潮の目の前に娘が顔を赤くしながら押し倒されている（ように見える）雫と押し倒している（ように見える）悠一がいます。

さらに潮は親バカの親バカ。この後何が起きるでしょう？

正解は……

「貴様あ！私の可愛い娘になにしとるんだあ!!」
「え、！ちよっ：グハア！」

悠一の顔面に潮の鉄拳制裁が下る！でした！

殴られた悠一は反り返りながら倒れていき

「ちよつと、お父さん！悠一は悪くないの！」

「黙ってなさい！雫！娘をほのかちゃんたちの前でたぶらかそうとしたのだ、当然地下牢行きにきまつてる！」

「え！そんなのあるんですか！」

「ほのか驚くところそこじゃないって！悠一くん！大丈夫!？」

大丈夫じゃない、そんなことを思いながら悠一は気絶した。

作品のリメイクについて

皆様お久しぶりです。三日月達也です。今回はこの作品「魔法科高校の黒トリガー使い」の大幅修正、リメイク版を新たに別作品として作ることにしました。

理由はこの作品がどんどん雑になっていくことが主な原因です。

読者の皆様は「今のやつを修正するのだからわざわざ別作品にする必要はない」と思うかもしれませんが、新しく考えてある物語と今の物語を区別してもらうために別作品として出すことにしました。

そもそも小説を書き始めるきっかけは、タイピングの苦手を克服するためと息抜きをするために始めました。

ですが去年の12月から忙しさが増して中々書く時間が取れませんでした。最近は、徐々に落ち着いてきたので、今月と来月は安定して書けそうです。

今のところ、週一で投稿しようと思います。

またこの数か月の間に他の作品に浮気していました件は……え罰ゲーム？毎日精神的苦痛受けているのと睡眠時間減少しているののでそれで勘弁してください……社畜の苦しさの入り口を知ったこの年です。

タイトルは「魔法科高校の黒トリガー使い Reboot」です。タイトルがあまり変わっていないのは気にしないでください。

ヒロインは前にとったアンケートで決めたメンバーにするつもりです。

投稿は毎週日曜日を目標にしています。

またこの「魔法科高校の黒トリガー使い」は一応残しておこうと思っています。

期待していた内容と違う、つまらないと思う内容になるかもしれませんが自分が自分なりに考えた世界を書いていくのでそこはご了承ください。

「魔法科高校の黒トリガー使い Reboot」第一話は来週の日曜投稿予定です。

何か月もお待たせした挙句身勝手に申し訳ありませんがこれからもよろしく願います。

お知らせは以上です。

※ここからは茶番、(字数稼ぎ)です。

そういえば作品を書いてない間のFGOのガチャ爆死が頻発しているんですがこれ一種の呪いなんですかね……

青セイバー狙いのピックアップで15回引いたらエリちゃんが出てきました(二枚目)

ちなみに無課金を貫き通しています。一度でも課金したら抜け出せなさそうなので……

とりま今はぐだぐだイベント頑張ります。まだノツブに撃たれた最初しかプレイしてませんが……いやあノツブがシリアスモードからだとは思いいにもよりませんでした。はたしてこれからどうなっていくのやら。

では、いつも通りフレンド便りの戦法で周回地獄に行ってきた……

以上、茶番(字数稼ぎ)でした。